

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

X-1

1983

滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書

X - 1

1983

滋賀県教育委員会

財団法人滋賀県文化財保護協会

001.2
P. 27

序

滋賀県下のは場整備事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査は、はや10年目を迎えることになりました。この間は場整備事業の拡大に伴い発掘調査件数も年々増加をしてきました。

このような状況のもとで発掘調査と開発事業との間で大きな問題が生じることなく発掘調査が円滑に実施出来ておることは関係機関の御理解の賜ものと感謝いたします。

発掘調査で得られた資料や成果を公開し、広く県民に資料提供するため、ここに昭和57年度に実施しました発掘調査の報告書を刊行することにいたしました。

この報告書が、滋賀の埋蔵文化財に関する理解を深めていただく一助になれば幸いです。

最後にこの調査に御協力をいただきました地元関係者および関係諸機関の方々に対し厚くお礼申し上げます。

昭和58年3月

滋賀県教育委員会事務局
文化部文化財保護課長

外池忠雄

例 言

1. 本書は、滋賀県の実施する県営ほ場整備事業に係る法養寺遺跡・栗師堂遺跡・矢守遺跡・軽野遺跡の発掘調査報告書で、ほ場整備関係発掘調査報告書のX-1に当る。

2. 本調査は滋賀県教育委員会の指導により財団法人滋賀県文化財保護協会が実施した。

3. 調査および整理・報告は滋賀県教育委員会文化財文化財保護課技師葛野泰樹が担当し、主任調査員として財団法人文化財保護協会嘱託調査員徳綱克己が当った。

4. 各遺跡の調査・整理には下記の協力を得た。

法養寺遺跡

・調査補助員：北川利孝（大阪学院大学）、入野隆治・原田弘文・奥村義治（立命館大学）、端矩勇貴・山田幸夫（滋賀県立短期大学）、林 浩司（仏教大学）、小山みのり・中村康子・小倉美奈子（京都女子大学）、北川ともえ（京都和装学園O. G）

栗師堂遺跡

・調査補助員：西村武史（大阪学院大学O. B）林 浩司・西川 健・吉備浩子（仏教大学）、入野隆治（立命館大学）、中村康子・小倉美奈子（京都女子大学）

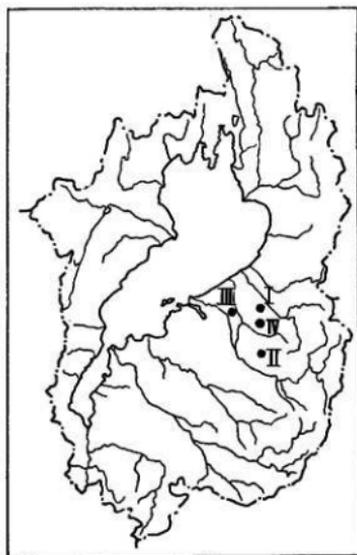
矢守遺跡

・調査補助員：西村武史（大阪学院大学O. B）、西川 健・林 浩司（仏教大学）中村康子・小倉美奈子（京都女子大学）

軽野遺跡

・調査員：西村武史（大阪学院大学O. B）
・調査補助員：西川 健・林 浩司・吉備浩子（仏教大学）、北川利孝（大阪学院大学）、三浦正博・重田和良（岐阜経済大学O. B）、端世志彦（大阪工業大学）、稻森勝宏（大阪学院大学O. B）、西村和英（大阪電気通信短期大学）、端矩勇貴・吉川勝行・紀平純一・山田幸夫・奥村義治（滋賀県立短期大学）、小倉美奈子（京都女子大学）

5. 本書の編集・執筆は葛野が当った。図面の整理には林 浩司、遺物の整理には小倉美奈子・中村康子・吉備浩子の尽力があり、遺物写真については寿福 滋氏の協力を得た。また、本稿の校正については、滋賀県埋蔵文化財センター目片さち氏の協力を得た。



本報告所収遺跡位置図

- I. 法養寺遺跡 II. 桑師堂遺跡
III. 矢守遺跡 IV. 経野遺跡

目 次

第1章 犬上郡甲良町法養寺遺跡

1. はじめに	1
2. 位置と環境	2
3. 調 査	5
1. 調査経過	5
2. 調査日誌(抄)	5
4. 遺 構	9
5. 遺 物	11
6. ま と め	15

第2章 愛知郡湖東町薬師堂遺跡

1. はじめに	17
2. 位置と環境	19
3. 調 査	21
1. 調査経過	21
2. 調査日誌(抄)	21
4. 遺 構	23
5. 遺 物	26
6. ま と め	28

第3章 愛知郡秦荘町矢守遺跡

1. はじめに	31
2. 位置と環境	31
3. 調 査	34
1. 調査経過	34
2. 調査日誌(抄)	34
4. 遺 構	36
5. 遺 物	41
6. ま と め	47

第4章 愛知郡秦荘町軽野遺跡

1. はじめに	49
2. 位置と環境	51
3. 調査	54
1. 調査経過	54
2. 調査日誌(抄)	54
4. 遺構	56
5. 遺物	60
1. 瓦類	60
2. 土器類	65
6. まとめ	68

図版目次

法養寺遺跡

- 図版一 1 法養寺遺跡調査地遠景（南から）
2 法養寺遺跡調査地遠景（北から）
- 図版二 1 Aトレンチ S B 8201（東から）
2 Cトレンチ S B 8202・8203（南から）
- 図版三 1 Jトレンチ S B 8204（西から）
2 Sトレンチ S B 8205（西から）
- 図版四 1 Gグリット S D 8201（東から）
2 Pグリット S D 8202（西から）
- 図版五 1 Rトレンチ S R 8201（北西から）
2 Qトレンチ（北西から）
- 図版六 1 Kグリット（北東から）
2 Tグリット（南西から）
- 図版七 1 Cトレンチ S K 8201（南から）
2 Sトレンチ S B 8205柱穴遺物出土状況
- 図版八 出土遺物

薬師堂遺跡

- 図版一 1 薬師堂遺跡遠景（東から）
2 薬師堂遺跡遠景（西から）
- 図版二 1 Hトレンチ掘立柱建物群・溝（南から）
2 Hトレンチ掘立柱建物群（東から）
- 図版三 1 S B 8201・8202（北から）
2 S B 8203・S A 8201（東から）
- 図版四 1 S D 8201（南から）
2 S D 8201（北から）
- 図版五 1 Cトレンチ S R 8201（南東から）
2 Fトレンチ S R 8201（北西から）
- 図版六 1 Gトレンチ S R 8201（北から）
2 現地説明会風景
- 図版七 出土遺物

矢守遺跡

- 図版一 1 矢守遺跡調査地遠景（東から）
2 矢守遺跡調査地遠景（南西から）

- 図版二 1 Bトレンチ掘立柱建物群(南から)
 2 Bトレンチ掘立柱建物群(北東から)
 図版三 1 Bトレンチ掘立柱建物群(北から)
 2 BトレンチS B8204(南から)
 図版四 1 CトレンチS B8206(北から)
 2 CトレンチS B8205(北から)
 図版五 1 DトレンチS B8207(南から)
 2 BトレンチS K8201(南から)
 図版六 1 BトレンチS K8203(東から)
 2 BトレンチS K8204(南から)
 図版七 1 BトレンチS K8205(南から)
 2 KグリットS D8214(東から)
 図版八 1 KグリットS D8216・8218(北東から)
 2 Dトレンチ(南西から)
 図版九 1 Cトレンチ(南東から) …
 2 Cトレンチ拡張部(南東から)
 図版十 出土遺物(1)
 図版十一 出土遺物(2)
 図版十二 出土遺物(3)

軽野遺跡

- 図版一 1 軽野遺跡遠景(北東から)
 2 1B-1トレンチ礎石(北西から)
 図版二 1 1B-1トレンチ礎石(南西から)
 2 1B-1トレンチ礎石(北西から)
 図版三 1 1B-1トレンチ礎石(南東から)
 2 1B-1トレンチ礎石横瓦列
 図版四 1 1B-1トレンチ礎石横溝(南東から)
 2 1B-7トレンチ瓦窯、左:1号窯、右:2号窯(東から)
 図版五 1 1号瓦窯、灰原(東から)
 2 1号瓦窯(東から)
 図版六 1 1号瓦窯燃焼室縦断面(南から)
 2 1号瓦窯燃焼室横断面(東から)
 図版七 1 2号瓦窯(北から)
 2 1B-1トレンチ瓦堆積状況(北西から)
 図版八 1 1B-5トレンチ(南西から)
 2 1B-4トレンチ(南西から)
 図版九 1 2A-4トレンチ(北東から)

- 2 2B-2トレンチ (南西から)
- 図版十 1 2A-3トレンチ旧河川跡 (南から)
- 2 1B-5トレンチ旧河川跡 (南から)
- 図版十一 出土遺物 (軒丸瓦)
- 図版十二 出土遺物 (軒丸瓦)
- 図版十三 出土遺物 (軒丸瓦・丸瓦)
- 図版十四 出土遺物 (軒丸瓦)
- 図版十五 出土遺物 (土器)

挿 図 目 次

法 養 寺 遺 跡

- 第1図 法養寺遺跡位置図および周辺の遺跡…………… 1
- 第2図 法養寺遺跡測量図および調査範囲図…………… 3
- 第3図 法養寺遺跡グリット・トレンチ位置図および地区割り図…………… 4
- 第4図 Eトレンチ掘削作業風景…………… 5
- 第5図 Aトレンチ遺構検出状況…………… 5
- 第6図 法養寺遺跡A～C・F・G・Jグリット、トレンチ平面実測図…………… 7
- 第7図 法養寺遺跡G・K・L・N・P～Uグリット、トレンチ平面実測図…………… 8
- 第8図 法養寺遺跡S R8201断面実測図…………… 10
- 第9図 法養寺遺跡出土遺物実測図(1)…………… 12
- 第10図 法養寺遺跡出土遺物実測図(2)…………… 13

薬 師 堂 遺 跡

- 第1図 薬師堂遺跡位置図および周辺の遺跡…………… 18
- 第2図 薬師堂遺跡測量図およびグリット・トレンチ位置図…………… 20
- 第3図 薬師堂遺跡Hトレンチ平面実測図…………… 23
- 第4図 薬師堂遺跡掘立柱建物平面実測図…………… 24
- 第5図 薬師堂遺跡GトレンチS R8201断面図…………… 24
- 第6図 薬師堂遺跡出土遺物実測図…………… 26

矢 守 遺 跡

- 第1図 矢守遺跡位置図および周辺の遺跡…………… 32
- 第2図 矢守遺跡測量図および調査範囲図…………… 33
- 第3図 矢守遺跡Aトレンチ掘削作業風景…………… 34
- 第4図 矢守遺跡B～D・Hトレンチ平面実測図…………… 36・37
- 第5図 矢守遺跡S K8201～8205平面実測図…………… 37
- 第6図 矢守遺跡F・Kトレンチ平面実測図…………… 39

第7図	出土遺物実測図(1).....	42
第8図	出土遺物実測図(2).....	43
第9図	出土遺物実測図(3).....	44

軽野遺跡

第1図	軽野遺跡位置図および周辺の遺跡.....	50
第2図	軽野遺跡調査範囲図.....	52
第3図	軽野遺跡トレンチ位置図.....	53
第4図	暗渠排水工事状況.....	54
第5図	1B-1トレンチ調査状況.....	54
第6図	1B-1トレンチ平面実測図.....	56
第7図	1B-1トレンチ礎石周辺平面実測図.....	57
第8図	軽野遺跡瓦窯平面実測図.....	57
第9図	軽野遺跡1号瓦窯実測図.....	58
第10図	軽野遺跡1B区トレンチ断面図.....	58
第11図	軽野遺跡出土遺物(軒丸瓦)実測図.....	63
第12図	軽野遺跡出土遺物(軒平瓦)実測図.....	64
第13図	軽野遺跡出土遺物(丸瓦)実測図.....	65
第14図	軽野遺跡出土遺物(土器)実測図.....	66

第1章 犬上郡甲良町法養寺遺跡

1. はじめに

本調査は、滋賀県が実施する県営は場整備事業（法養寺第1工区）に伴うものである。法養寺遺跡は以前から遺物の散布が知られ、字名に大字法養寺小字番城寺・舞台・下窪葛城・堂前等の名をみることから、寺院跡の可能性のある遺跡として周知されていた。遺跡の範囲は現法養寺集落とかなり重複していると思われるが、範囲、性格、時期等は明らかにされておらず、工事実施前に発掘調査を行ない遺跡を明らかにし、その保存を講ずることとした。

今回は場整備の対象となるのは法養寺集落の東側約4.9 haであり、発掘調査は工事実施地区全域を対象とした。

調査は文化財保護課が県農林部耕地建設課より予算(2,220,000円)の再配当をうけ、財団法人滋賀県文化財保護協会へ委託して実施した。調査、整理期間は昭和57年7月～昭和58年3月までとした。

なお、この調査にあたっては甲良町教育委員会をはじめ地元法養寺、下ノ郷の方々にお世話になった。ここに記して謝意を表します。



第1図 法養寺遺跡位置図および周辺の遺跡(S=1/50000)

1. 法養寺遺跡
2. 尼子南遺跡
3. 長畑遺跡
4. 下の郷西遺跡
5. 水沼在跡
6. 敏満寺遺跡
8. 安食西古墳
9. 尼子古墳群
10. 下の郷古墳群
11. 宮後西古墳
12. 北落古墳群
13. 三博古墳群
14. 四ツ塚古墳群
15. 横枕古墳群
16. 西ヶ丘古墳群
17. 二子塚古墳
18. 金澤北古墳
19. 金屋南古墳群
20. 外輪古墳群
21. 堀之内古墳群
22. 寺道古墳群
23. 正楽寺古墳群
24. 狐塚古墳
25. 金屋遺跡
26. 正楽寺山城跡

2. 位置と環境

法養寺遺跡は、滋賀県犬上郡甲良町大字法養寺地先に所在する。法養寺は大上川によって形成された洪積地にあり、標高約118mを測る。遺跡は現集落を中心に半径約500mの円形をえがく規模をもつとみられるが、詳細な範囲は明らかでない。

法養寺集落は慶長年間(1596～1615)に大上川の大洪水を避け、全村をあげて約300m南東の現在地に移住したと伝えている。旧集落跡地には神明神社が祀られている。神明神社の南側に小字橋ノ向、橋渠があり、現在水田となっているものの、周囲の地形より1段低く河川があったようである。

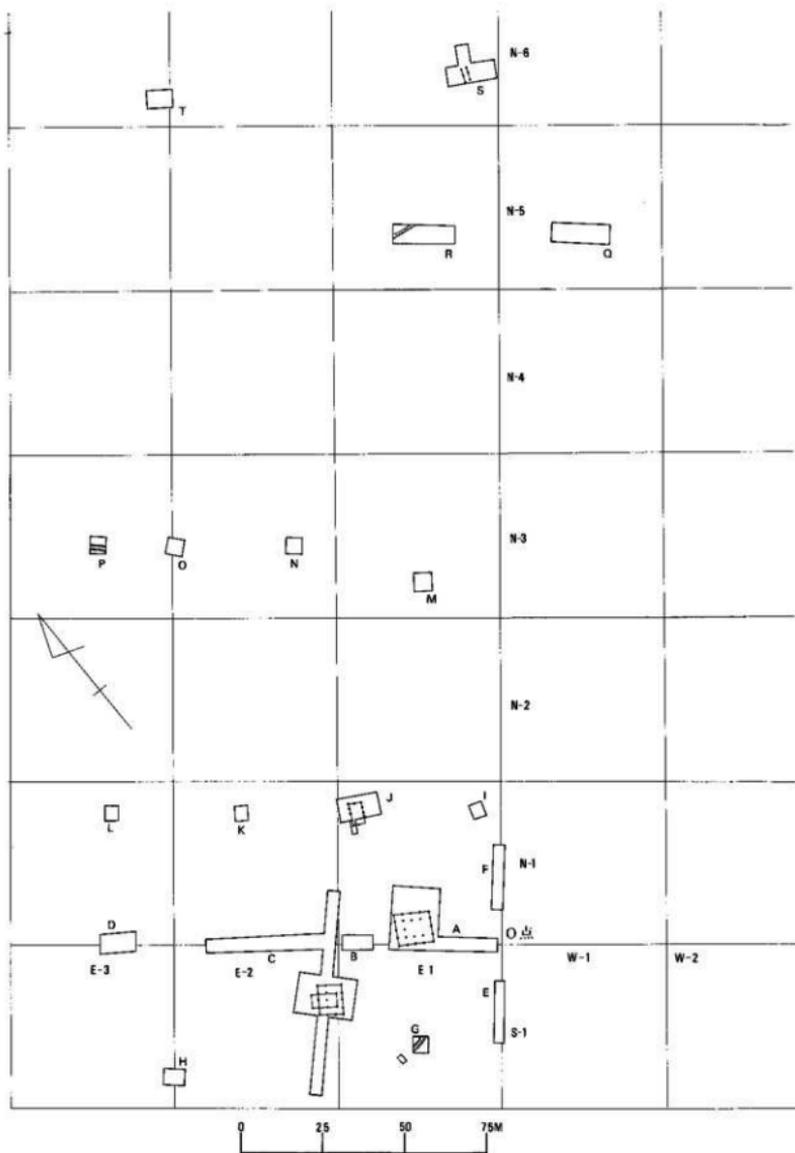
当遺跡の周辺をながめてみると、北側に県指定甲良神社がある。甲良神社は治暦年間(1065～69)に甲良荘総社甲良神社としてその名を創記にのせている^①。甲良神社と当遺跡との間にはわずかに墳丘を残す宮後西古墳がある。

古墳は甲良町東方の金屋、池寺、正楽寺、九条野にかけて数多くの古墳群をみることができ、その数は100基は下らないといわれている。金屋には縄文土器の出土する金屋遺跡もある^②。

集落跡は、当遺跡の西方に在土北、尼子南遺跡が位置し、奈良時代から平安時代にかけての集落跡とみられている^③。荘園関係では、甲良町は「正倉院文書」でいう甲良郷と尼子郷に相当し、当地は旧甲良郷に属する。甲良町には犬上郡条里制地割を所々に見ることができ、平安時代には延暦寺・日吉神社・園城寺・東大寺・興福寺等の荘園が存在している^④。甲良荘はかなりの規模を有していたと思われる。これら寺領の荘園成立については、犬上郡を本拠地としていた犬上氏や諸豪族との関係にも検討をほらうことも必要であろう。



第2図 法雲寺遺跡測量図および調査範囲図



第3図 法養寺遺跡グリッド・トレンチ位置図および地区割り図

3. 調 査

1. 調査経過

昭和57年度の調査は、法善寺工区約4.9haを対象とし、排水路施行部分と50~100m間隔に任意の試用グリットを設定した。さらに、各グリット、トレンチ検出の遺構の拡がりに基づき調査面積を拡張し、遺構、遺物の追求を行なった。

調査の基準点は第5号排水路と第5号支線道路の交点を0点と定め、西にのびる第5号小排水路の中心線を基準に50m間隔にE1・2・3……、W1・2・3……とし、第5号支線道路の中心線を基準に50m間隔にN1・2・3……、S1・2・3……と地区割をした。さらに、便宜的に各グリット、トレンチをA・B・C……Tと番号を付した。グリット、トレンチは合計で20本設定し、遺構の認められたA・C・J・Sトレンチを拡張した。(第3図)

今回調査をした地区の基本土層はA・Cトレンチ付近は耕作土下はすぐ黄褐色土層の遺構面となる。J・Rトレンチは砂礫層の堆積をみる。A・C・J・Sトレンチからは掘立柱建物を検出し、K・L・N・Qトレンチには数基の柱穴をみた。さらにGグリットには東西方向にのびる溝があり、Rトレンチからは河川跡を検出した。

2. 調査日誌(抄)

昭和57年

7月1日 本日より発掘調査に入る。運具搬入とテント設置および遠景写真撮影。

7月2~6日 基準杭の設置とトレンチ、グリットの設定。

7月9・10日 E・Fトレンチ掘削。表土下0.4mで明灰褐色粘土の地山面となる。Fトレンチから柱穴数基検出。

7月12~14日 A~Cトレンチ掘削。Aトレンチから掘立柱建物検出。Cトレンチには柱穴を多くみる。

7月15~17日 A・Cトレンチ拡張。

7月20日 Aトレンチ遺構検出作業。G~Lグリット掘削。

7月21・22日 A・Cトレンチ柱穴掘り下げ作業。

M~Pグリット掘削。

7月23日 Q~Tグリット、トレンチ掘削。A~Cトレンチ写真撮影。

7月26~28日 O~Tグリット、トレンチ再度



第4図 Eトレンチ掘削作業風景



第5図 Aトレンチ遺構検出状況

掘削し地山面を検出する。Rトレンチから河川跡検出。

他のグリットから数基の柱穴を検出。

7月29日 Sトレンチから掘立柱建物検出。

7月30・31日 Cトレンチ再度拡張。掘立柱建物2棟と土壌検出。

8月4～6日 各グリット写真撮影。

8月7日 Jグリットの柱穴は掘立柱建物としてまとまる。Rトレンチの河川跡から多数の遺物が出土する。

8月9～11日 グリット、トレンチの平板測量(S=1/500)。

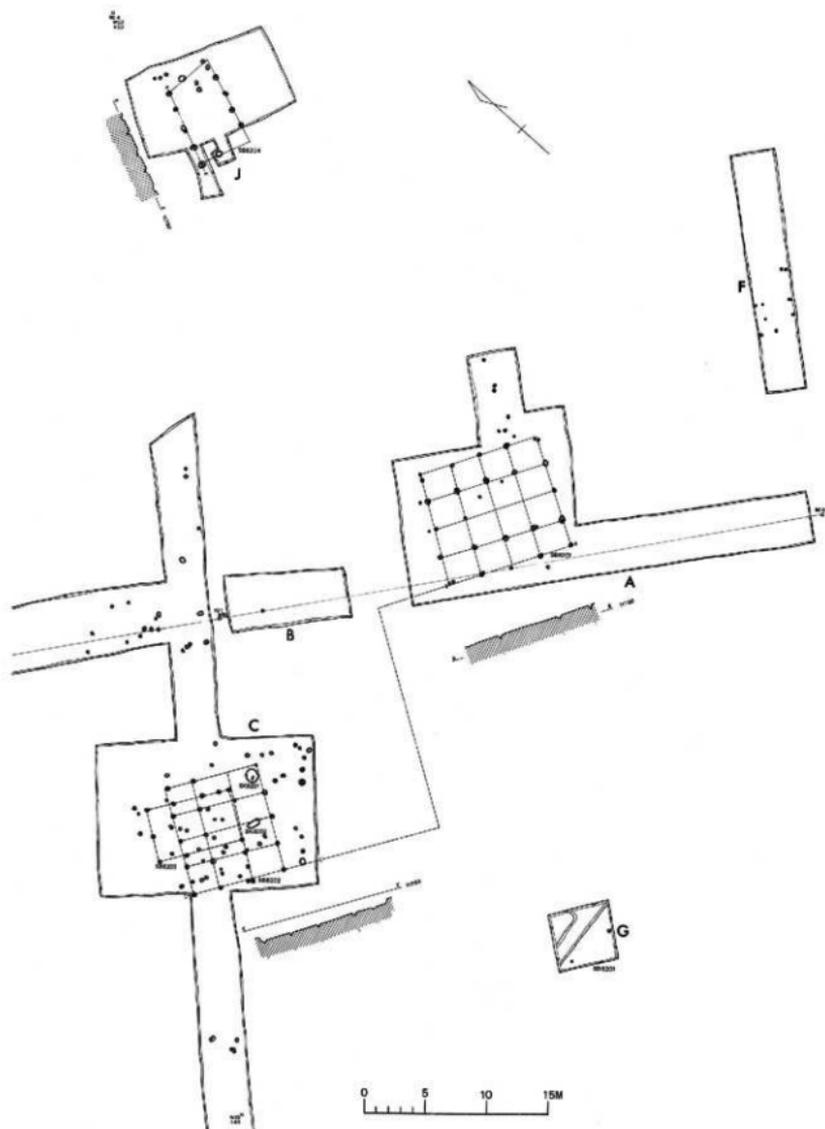
8月12日 Q～Tグリット、トレンチの実測用割り付け作業。

8月21日 Aトレンチ実測作業。

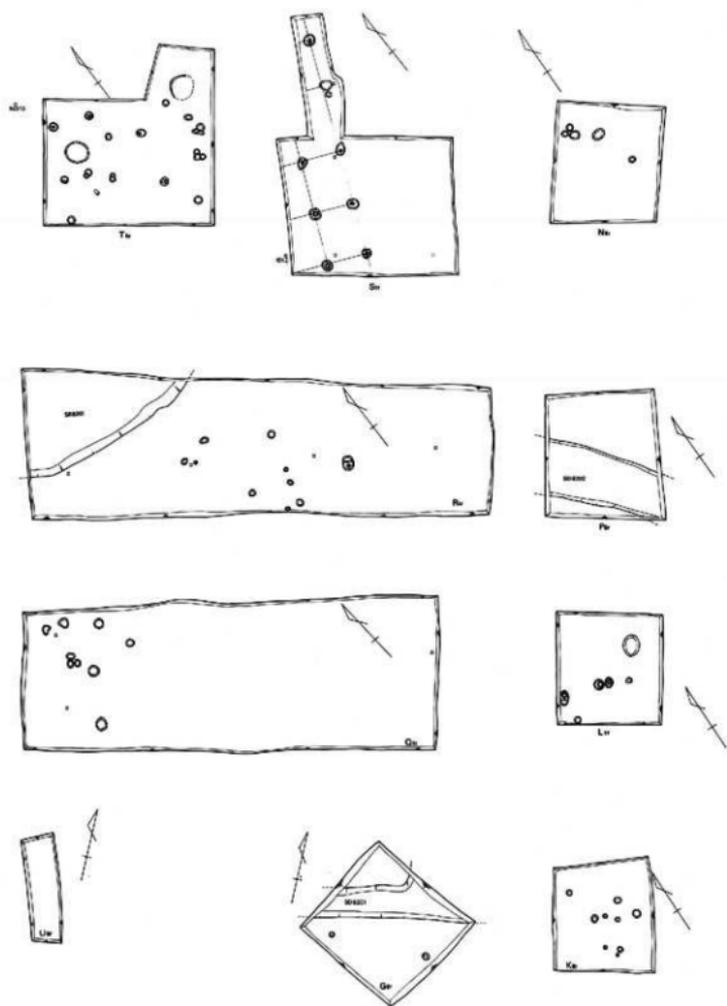
8月22～25日 C・F・Jトレンチ実測作業。

8月26～28日 D～Kグリット実測作業。

8月30・31日 I～Tグリット、トレンチ実測作業。本日をもって現地調査を完了する。



第6図 法養寺遺跡A・C・F・G・J グリッド・トレンチ平面実測図



第7図 法養寺遺跡G・K・L・N・P～Uグリッド・トレンチナ平面実測図

4. 遺構 (第6~8図、図版二~七)

今回検出した遺構は掘立柱建物5棟、土壇2基、溝2条、河川跡1条等と数基の柱穴群である。

Aトレンチ 掘立柱建物1棟を検出した。

S B8201 桁行4間(9.8、10.3m)、梁行4間(9.3m)、床面積約93.5㎡の規模をもつ東西棟建物である。建物内に東柱が認められ、総柱建物に近い。建物の方位はN33°50'Eを示す。柱間は桁行2.6m、梁行2.3mを測り、柱穴は平面円形を呈し、掘方は直径0.3~0.5m、柱痕は約0.15mを測る。建物はやや台形を呈するものの、各柱列はよく揃う。

Cトレンチ 掘立柱建物S B8202・8203、土壇S K8201・8202と数基の柱穴とがある。

S B8202 S B8201の西側約21mにあり、桁行4間(8.8m)、梁行3間(7.6m)の南北棟建物で、床面積約66.9㎡を測る。この建物も東柱をもち総柱建物に近い。方位はN34°Eを示し、S B8201とはほぼ同値である。柱間は桁行2.0~2.3m、梁行2.2~2.6mを測り、建物西側の柱間が狭い。各柱列はよく揃う。柱穴は平面円形を呈し掘形の直径は0.3~0.4m、柱痕径は0.15~0.2mである。建物内にはS K8201・8202がありS B8203と重複する。

S B8203 S B8202の北西部と重複する建物である。桁行3間(6.9、7.1m)、梁行2間(4.3m)、床面積約30.1㎡の規模をもつ東西棟建物で方位はN33°50'Eを示す。柱穴のうち東側中央の妻には柱は認められず、桁行の南列と北列の柱間は等間ではない。柱間は桁行北列で2.2~2.4m、南列は1.6、3.2、2.3mの不等間である。梁行西側は2.15mの等間である。柱穴はすべて平面円形を呈し掘形の直径は0.3m、柱痕径は0.1mと細い。この建物も総柱建物と思われるが、東から2列目の梁に大きな歪みを見る。

S K8201 S B8202の北東限にある土壇で、平面円形を呈する。直径1.0mを測り、底部は丸く最深部で0.24mある。土壇内から山茶坑の出土をみた。

S K8202 S K8201の南西約3mに位置し、S B8202の東側限にある。平面楕円形を呈し、長辺1.15m、短辺0.55mを測り、底部は丸く舟底状を呈する。深さは0.06mである。

Gグリット 溝S D8201と溝に平行する柱穴2基を検出した。

S D8201 はば東西方向にのびるもので、N80°30'Eを示す。長さは6m以上、幅1.2mを測り、断面U字形を呈し、深さは0.4mである。東側で北辺のみ北方へ屈曲する。その屈曲部から須恵器杯蓋が1点出土した。

Jグリット 掘立柱建物S B8204と数基の柱穴を検出した。

S B8204 S B8201の北約30mにあり、桁行4間(6.3m)、梁行2間(3.9m)、床面積約24.6㎡の規模をもつ南北棟建物である。方位はN23°Eを示し、上記の3棟より約10度西へ振る。柱間は桁行1.5・1.9m、梁行1.5・2.4mで、柱筋はよく揃うが、柱間は一定ではなく歪みがみられる。柱穴の掘形は平面円形と楕円形を呈し、直径0.3~0.5mを測り、柱痕は直径0.15mである。他の3棟と比して掘形は大きい。

K・Lグリット Kグリットからは直径0.05~0.1mの平面円形を呈した柱穴を7基検出した。柱穴の中には南北方向に柱筋を揃える3基がある。柱間は1.5mの等間隔であることから、建物の一部になる可能性がある。建物とすれば建物の西側部分になるであろう。

Lグリットには6基の柱穴がある。柱穴の並びは不規則である。

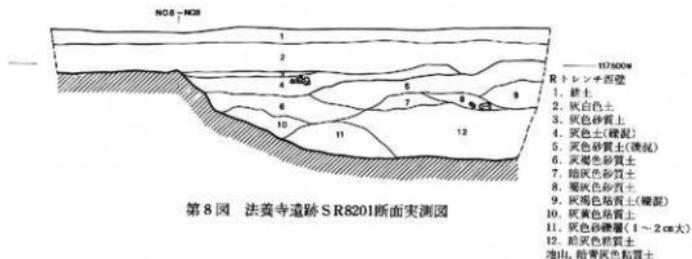
N・Pグリット Nグリットには5基の柱穴がある。Lグリットと同じく建物を推想できない。

Pグリットからは南東から北西にのびる溝S D8202を検出した。長さは5m以上、幅は0.2~0.25mを測り、

深さは0.15mである。

Q・Rトレンチ は場整備第3号小排水路に設定したトレンチで、Qトレンチからは柱穴9基を、Rトレンチからは河川跡S R8201と柱穴10基検出した。

S R8201 東から西方に流れる河川跡で、南側肩部を検出した。長さは7.5m以上、幅4m以上を測り、深さは1.2 mである。埋土は灰色系の砂礫層が堆積し、上層4～6.10層に多くの遺物を包含する。



第8図 法養寺遺跡S R8201断面実測図

Sトレンチ 掘立柱建物S B8205を検出した。

S B8205 桁行4間以上(9m以上)、梁行1間以上(1.7m以上)の規模をもつ。方位はN23°Eを示しS B8204と同一方向である。柱穴は平面円形を呈し掘形の直径は0.4m、柱痕径は0.15～0.2mを測る。柱間は2.0～2.6mである。柱筋は比較的よく通る。

Tトレンチ 直行0.1mまでの柱穴18基と直径約0.4mの柱穴を2基検出した。小柱穴の深さは浅く0.1m前後を測る。今のところ小柱穴の上部構造は明らかではない。

5. 遺物 (第9・10図、図版八)

今回の調査では、遺構の大部分が耕作土直下から検出されたため明らかな遺物包含層はなく、また、各遺構出土の遺物の残りも良好とはいえなかった。ここでは、比較的形態のとらえられるもので、遺構に伴った遺物を中心に記述する。

S B8201 土師器皿(1・2)がある。ともに小皿で、1は口径10.5cm、器高2.0cm、2は復元口径10.4cmを測る。1は口縁部を2段にナデ、2は1段とする。胎土、焼成はともに良く赤褐色を呈する。

S B8202 土師器皿(3)、黒色土器碗(4)がある。3は口径9.2cm、器高1.6cmの小皿で、口縁部を2段にナデ、内面を乱ナデする。底部外面に指圧痕を残す。4は内面のみ黒色のいわゆる「近江型黒色土器」である。口縁内面端部に1条の凹線をめぐるし、内面をヘラ磨きするのであるが、摩擦のため詳細な施文は明らかでない。復元口径12.6cmを測る。胎土は良く、焼成はやや軟質で淡赤褐色を呈する。

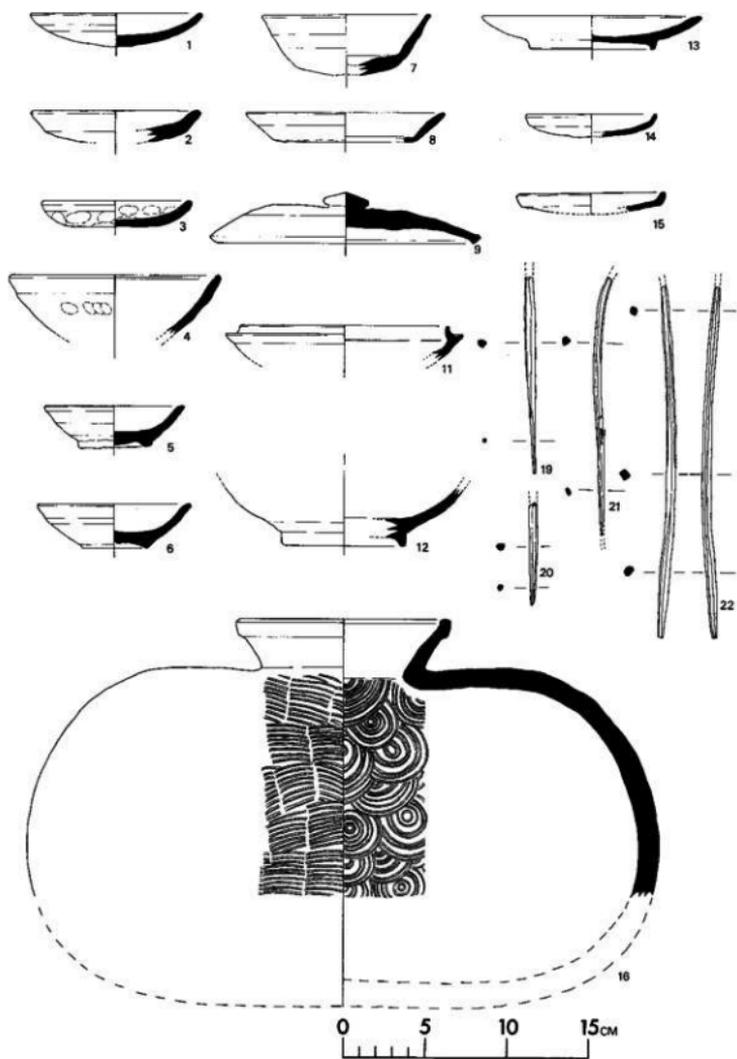
S K8201 山茶碗(5・6)の2点が出土した。ともに完形の小碗である。5は口径8.4cm、器高2.6cm、高台径4.5cmを測り、口縁端部はわずかに外反する。高台は断面台形を呈し、端部は凹凸する。底部外面に糸切り痕を残す。6は口径9.3cm、器高2.7cm、高台径3.9cmを測る。口縁端部は外反し、高台は断面三角形を呈する。胎土はともに砂粒を含み、焼成は良い。色調は淡灰色を呈し、所々に緑色の自然釉が付着する。

S B8205 須恵器杯身(7)、土師器皿(8)、陶器甕(18)がある。7は平底の杯身で底部に丸珠を残す。底部外面はヘラ切りのままである。復元口径10.3cmを測る。胎土は堅緻、焼成は良く青灰色を呈する。8は復元口径12.2cmの中皿である。底部と口縁部との境界は明瞭で、器壁は薄い。胎土、焼成は良く淡赤褐色を呈する。18は常滑製品の大甕である。口縁部は大きく外反し口径32.2cmを測る。肩はよく張り出し直径50.4cmあり、肩部まで釉は溶けて流れる。内面には粘土紐づくりの痕跡をよくとどめ、幅1.2~2.8cm粘土紐を接ぐ。体部外面の最大径付近に平行タタキの押印を施し、その下位は部分的に格子状にたたく。胎土は堅緻で焼成は良好である。色調は淡紫褐色を呈し釉色は淡緑黄色である。

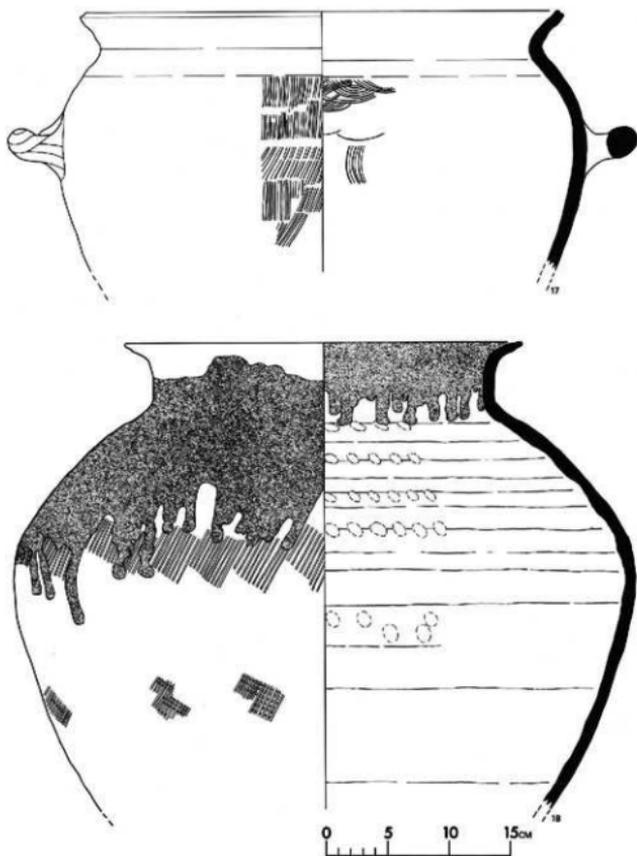
S D8201 須恵器杯蓋(9)がある。天井に饗宝珠状のつまみをつけ、口縁端部をわずかに垂下さす。天井部約1/2をヘラ削りし、他はいいいに横ナデ調整を施す。口径15.6cm、器高3.1cmを測る。胎土は堅緻、焼成は良く淡灰色を呈する。

S R8201 須恵器横瓶(16)・壺(17)、木製品箸(19~22)と他に須恵器、土師器の破片や木器では板材・箸・薪材などの出土品もある。16は横長の体部上面中央部に外反する口縁部をつけるもので、口縁端部を肥厚させ内側に段をもつ。口径は12.2cmである。体部外面は平行タタキを密に施し、内面に円形浮文を残す。胎土に砂粒を含み、石英粒もある。焼成は良く青灰色を呈する。17は広口短頸の甕で、体部最大径部に半球状の把手を付ける。復元口径38.4cmを測り、体部と変らない法量である。口頸部は丸く屈曲し、端部に面をもつ。体部外面は平行タタキを施し、内面は円形浮文の上をかかるとなる。胎土に砂粒を多く含み、小石もある。焼成は良く白灰色を呈する。箸は合計で15本出土した。このうち22はほぼ完形に近く21.5cmを測る。直径は中央部で約0.6cmあり4ないし5面に削り、両端は直径約0.3cmで6から7面に削り尖らす。21は残存長15.5cm、中央部直径約0.6cmで6面に削り、先端は直径0.3cmあり5面に削る。19は残存長12.0cm、中央部直径約0.7cmで6面に削り、先端はよく尖り0.15cmである。20は残存長6.3cmあり、端部を6から8面に削り先端径は0.15cmである。これら箸の使用材質はヒノキである。

L グリット出土遺物 須恵器杯身(11)、灰釉陶器皿(13)がある。柱穴から出土した。11は立ち上りをもつ器



第9图 法養寺遺跡出土遺物実測図(1)



第10图 法興寺遺跡出土遺物実測図(2)

で、立ち上りは短かく端部を丸くおさめる。胎土は堅緻、焼成は良く青灰色を呈する。13は口径13.4cm、器高3.0cm、高台径7.8cmを測る平皿で、口縁部は内湾ぎみに外方へのびる。底部内面に浅い段をもつ。底部外面に回転糸切り痕を残す。高台は粗雑な造りで低い。胎土・焼成は良く乳灰褐色を呈する。

Qトレンチ出土遺物 土師器皿(14・15)、灰軸陶器埴(12)が柱穴から出土した。14・15は器壁の薄い小皿で、口縁部を1段にナデ、わずかにつまみ上げる。15の口縁端部はやや肥厚になる。底部は丸味をおび未調整である。復元口径9.1cmで胎土・焼成は良く淡黄白色を呈する。12は体部の一部のみ遺存する埴で、高台の造りは良い。内面に淡緑灰色の施釉をみる。胎土・焼成は良く、素地は淡茶灰色である。

つぎに、今回出土した建物について若干の検討を加えてみることにする。

S K 8201出土の山茶埴5・6は法量的にかなり小型化した小埴で、高台は粗雑な造りになり高台のつく小埴では終末的要素をもつ。このような特徴は瀬戸窯山茶埴の第Ⅱ段階第4型式^⑤に類例を求めることができ、編年的には12世紀第3四半期に比定されよう。また、灰軸陶器12は折戸53号窯期の新しいタイプの特徴に似る。この期のタイプは11世紀代に下る可能性を持ち、山茶埴出現期前の灰軸陶器と考えられよう。

大甕18は外反する口縁部の端づくりのシャープなこと、肩の張り出しなどから重要文化財である和歌山黒比井若一王子神社経塚出土大甕や愛知県西椎ノ木山古窯出土の製品に類似性を求められ^⑦、12世紀後葉に位置付けが可能であろう。

S B 8201・8202出土の土師器小皿1～3は口縁部を1段と2段に横ナデ調整するもので、法量的にも平安時代後期の特徴をそなえている。平安京編年のⅣ期の古～中期に相当し^⑧、類例は高島町中ノ坊^⑨、愛知川町遺跡^⑩から出土する。黒色土器4も同時期に比定される。

S D 8201出土の須恵器杯蓋9は額宝珠のつまみ、口縁部、天井部の形態から陶邑編年Ⅳ型式2段階^⑪、榎木原編年Ⅳ類2段階^⑫に相当し平城宮のⅢ期の遺物に似る。その他この時期に相当する遺物としてはS R 8201出土の横瓶16と甕17があり、同一層から出土した著もこの時期の製品と考えてよいであろう。横瓶は天津市野炊遺跡^⑬のS E 002 出土の横瓶と近似し、8世紀第2四半期頃に比定されよう。

6. ま と め

今回の調査は、法養寺遺跡の西側を対象とした。遺跡は小字不動葛城・下窪葛城・藤ノ木・橋ノ向にかけて拡がり、さらに西へも拡がる事が判明した。

S B8201～8203は出土遺物から平安時代中期から後期までの時期に比定することができ、S B8204も前者の建物と時期差はないと思われる。建物相互の位置関係をみると、S B8201は東西棟を主軸にもち、S B8202は南北棟建物であることから、L字状に配置された建物群としてとらえることができる。両建物はいずれも東柱をもつ倉庫の建物とみられ、床面積はS B8201の方が約27㎡広い。また、S B8202は建て替えとみられるS B8203や土壇と重複するのに対し、S B8201は重複するものはない。

S B8204は4間×2間の建物で住居と考えられる。この建物の近くから検出された柱穴は、他に数棟の建物の存在を示唆したものとしてとらえることができ、ここにS B8204を中心とした建物群を想定することはできないであろうか。

また、SトレンチのS B8205も全貌は検出していないが、倉庫とみられるもので、ここにも1群を想定することは可能と思われる。さらに、S R8201の南側からも多数の柱穴を検出していることから、S R1の南側に建物群を想定できる。

このように考えると、今回の調査対象地では合計3群の建物群を想定することができ、仮に南からS B8201～8204をA群、S R8201の南側柱穴群をB群、S B8205を中心とするものをC群と番号を付す。

調査地区の南側に位置するA群についてみると、北側に住居状建物を配し、南側にL字状に倉庫群を配置する。本来は住居区としたところにはもう少し多くの建物があったと思われる。倉庫建物は床面積を約70㎡と93㎡と大きな規模をもち、柱穴は完全な縦柱建物ではない。柱の認められないS B8201の中央部、S B8202の東側を土間と考えることはできないであろうか。S B8202はその部分に土壇をもち、土間とするのが最も妥当と思われる。柱のある部分は板敷と考えられ、納屋の性格もあつたのではないだろうか。

時期は少し遅るが、平安時代前葉の草津市岡田追分遺跡^⑩は5棟から10数棟の建物が5～6ヶ所に集在し群を構成している。最もよくまとまっているb群を概観すると、9棟の建物は同一方位に建てられ、東側を住居区に、西側に倉庫・納屋をはさんで配置され、南側に井戸をともっている。丸山氏は「この数棟1群こそ、当時の農業生産の経営の単位^⑪」とし、いわゆる家父長制的世帯共同体と呼ばれるものであるとしている。

つぎに、岡田追分遺跡に後続する遺跡として志那中遺跡^⑫がある。この遺跡からは平安時代後期から鎌倉時代にかけての掘立柱建物が確認されている。建物規模は岡田追分遺跡より小さく、建物の群構成はみられず1棟ずつ散在し、建物方位、配置に規則性はない。さらに、倉と思われる建物は確認されていない。これは、調査範囲の規模による結果かもしれない。ともあれ、検出された建物は40～50mの間隔で1棟1単位に数単位が存在していた。その間は水田地帯であつたとしている。

このことから、丸山氏は志那中遺跡を「古代を切り抜けた農民の、中世的世界をうかがうことができるであろう。」とし「岡田追分遺跡でみられた家父長制的世帯共同体の自立した各戸戸に分立した形態である」と述べている。さらに、倉をもたないことから「律令国家体制の崩壊にともない、桑里地域、いわば水田地帯に農家が進出し、従来からの耕地と宅地の明確な分離がなくなり、経営主による作人への耕地への耕地の割り付けとして教村を形成せしめた」と結論づけている^⑬。

上記のことから、当遺跡の建物配置を検討してみると、建物の群構成は岡田追分遺跡に近似した形態をもつ

といえよう。ただ、時期的には律令体制の崩壊期にあたり、急速に単位集団である家父長制的世帯共同体の解体が進行し、荘園制的領域支配の成立する時期に相当するといえよう。

こうした状況下における法養寺遺跡は、12世紀中頃にあっては家父長制的世帯共同体の労働単位は存在しており、共同体的な機能は依然として展開していたとみることができよう。

律令制下村落から初期中世村落への過渡期の中で、法養寺遺跡は甲良荘の一つとして律令制村落を基盤とした勢力を守りつづけていたのであろう。

最後に、A・C・Jトレンチ等で検出された遺構は、景農林部との協議の結果、水田高を計画高より15cm上げることによって、現状で保存することになった。

註

- ① 池野 保 成瀬弘明『滋賀県指定有形文化財甲良神社本殿修理工事報告書』（滋賀県教育委員会 昭和57年）
- ② 滋賀県教育委員会 昭和56年度『滋賀県遺跡目録』（昭和56年）
- ③ 前掲書2
- ④ 竹内理三他編『25 滋賀県』『角川日本地名大辞典』（角川書店 昭和54年）
- ⑤ 藤沢良祐・宮石宗弘『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅱ（瀬戸市歴史民俗資料館 昭和58年）
- ⑥ 藤沢良祐・宮石宗弘『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要』Ⅰ（瀬戸市歴史民俗資料館 昭和57年）
- ⑦ 橋崎彰一編『日本の陶磁』古代中世篇 第4巻 常滑 瀬美 猿投（中央公論社 昭和51年）
- ⑧ 宇野隆夫・泉 拓良他『京都大学埋蔵文化財調査報告書』Ⅱ（京都大学埋蔵文化財研究センター 昭和56年）
- ⑨ 兼康保明他「高島町中ノ坊遺跡」（『はつ場整備関係遺跡発掘調査報告』Ⅴ 滋賀県教育委員会（財）滋賀県文化財保護協会 昭和53年）
- ⑩ 葛野泰樹 徳綱文己『市遺跡発掘調査概要』Ⅰ（愛知川町教育委員会（財）滋賀県文化財保護協会 昭和58年）
- ⑪ 中村 浩「陶邑」Ⅰ～Ⅳ（『大阪府文化財調査報告』第28～31輯 大阪府教育委員会 昭和51～54年）
- ⑫ 林 博通・葛野泰樹他『檀木原遺跡発掘調査報告』Ⅲ（滋賀県教育委員会（財）滋賀県文化財保護協会 昭和56年）
- ⑬ 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』Ⅳ（昭和57年）
- ⑭ 林 博通・栗本政志「近江国府関連官衙跡の調査」大津市瀬田野塚遺跡の調査概要（『古代文化』第35巻第1号 昭和58年）
- ⑮ 大橋信弥他「草津市追分岡田追分遺跡調査報告」（『滋賀県文化財調査年報』昭和50年度 滋賀県教育委員会 昭和52年）大橋信弥「草津市追分岡田追分遺跡調査報告」Ⅱ（『滋賀県文化財調査年報』昭和51年度 滋賀県教育委員会 昭和53年）
- ⑯ 丸山竜平他「律令制期の草津」（『草津市史』第一巻 草津市役所 昭和56年）
- ⑰ 大橋信弥・谷口 肇「草津市志那中遺跡」（『はつ場整備関係遺跡発掘調査報告』Ⅴ 滋賀県教育委員会（財）滋賀県文化財保護協会 昭和53年）
- ⑱ 前掲書16



1 法養寺遺跡調査地遠景（南から）



2 法養寺遺跡調査地遠景（北から）



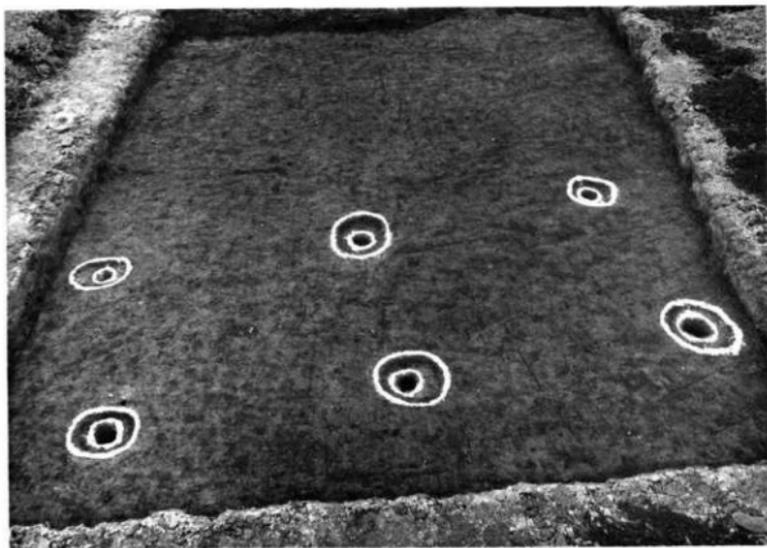
1 Aトレンチ SB8201 (東から)



2 Cトレンチ SB8202・8203 (南から)



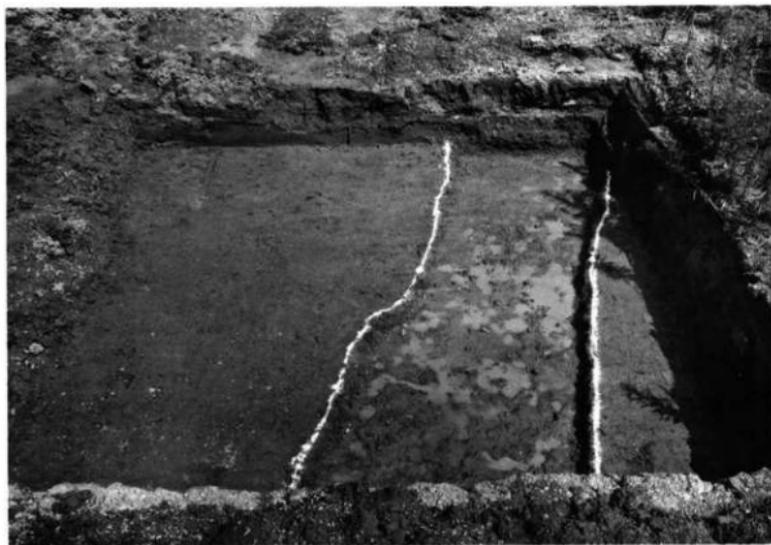
1 Jトレンチ SB8204 (西から)



2 Sトレンチ SB8205 (西から)



1 Gグリット SD8201 (東から)



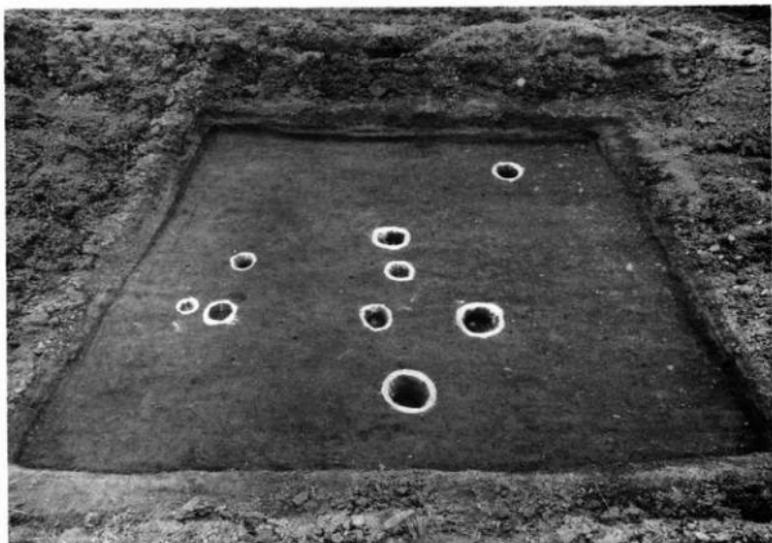
2 Pグリット SD8202 (西から)



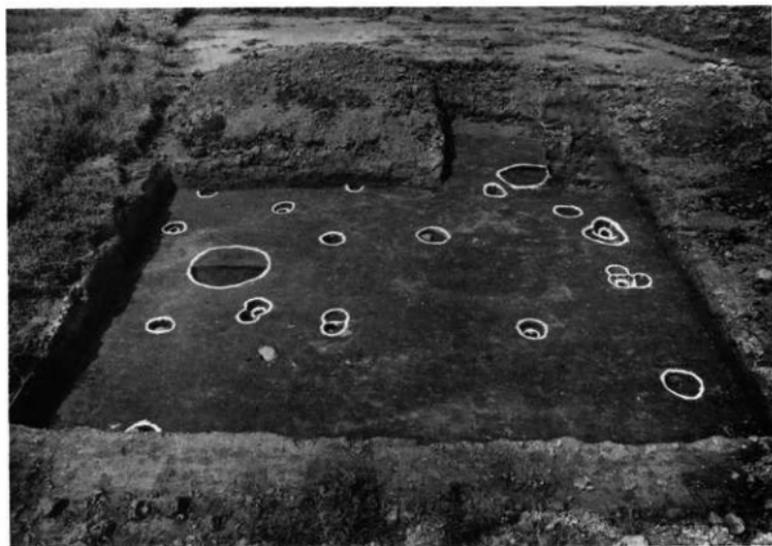
1 Rトレンチ SR8201 (北西から)



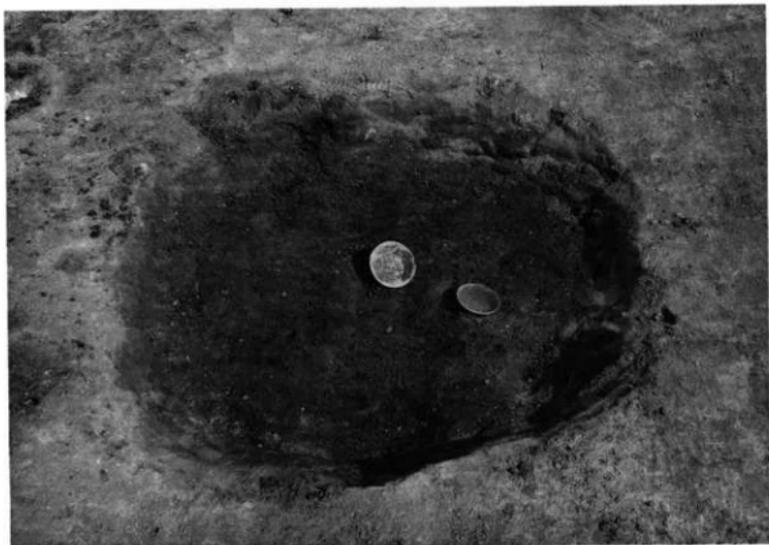
2 Qトレンチ (北西から)



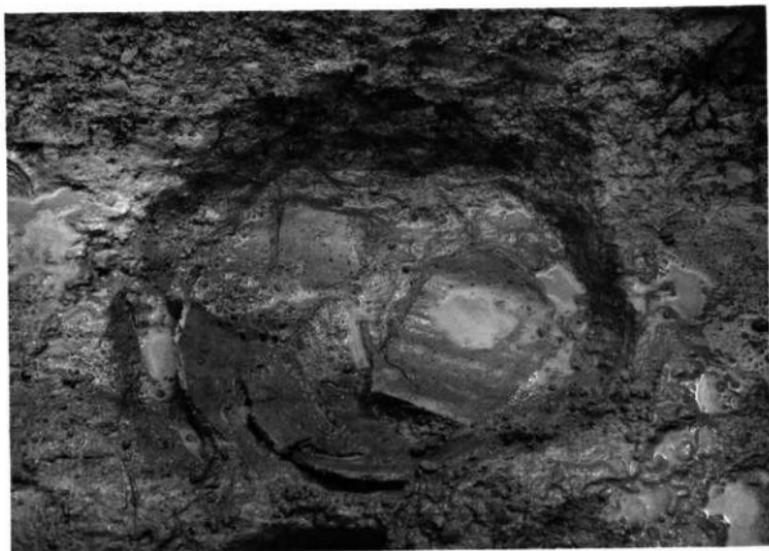
1 Kグリット (北東から)



2 Tグリット (南西から)



1 Cトレンチ SK8201 (南から)



2 Sトレンチ SB8205柱穴遺物出土状況



3



5



6



1

8



9



13



16



17



18

第2章 愛知郡湖東町薬師堂遺跡

1. はじめに

薬師堂遺跡は、湖東町立体育館建設のおり土師器の小皿が数点出土していたことから近くに遺跡の存在をいわれていた。その位置、範囲、性格等は詳みらかではなく、今日にいたっていた。従って、今回池庄地先で果は場整備工事（池庄第2工区）が約24 haにわたって実施されることになったため、事前に発掘調査を行ない、遺跡の範囲、性格等を明らかにし、遺跡の保存策を講じるようになった。

薬師堂遺跡と関節的に関連づけられる文献に『近江愛知郡志』の以下の文章がある。「薬師氏は薬師如来の名を負ふ。（中略）薬草採取の為に分置せられし氏族にて部人なり。蒲生郡鏡山村に大字薬師あり。本郡には地名は存せざれども貞観三年十月大國郷の田券に薬師安齊の名見ゆるは当郡に配置せられし薬師部の族ならん。」と記述している。そこでその田券をみると、

[埼玉県大里郡古身村根岸伴七氏所蔵文書]

愛智郡大國郷尸主依知泰公福万解 申、依正税常土、売買置田、立券文事

上三条、十一里、一、川原田、惣段伍割拾歩 西^(内)方直稻陸拾束

右件置田、正税稻陸拾束、充₂價直₂、限₂水年₁、奉₁沽₂□₁薬師安齊₁既₁、望₁請、依₂式、立₂券文₁、如件₁、仍勅₂売買面人署名₁、以解

貞観三年十月十九日

置田主 依知泰公福万

相 売 依知泰公福貞

依知泰公貞成

保証人、正八位下 依知泰公貞宗

泰忌寸 家継

従八位 依知泰公長吉

依知泰公又男

徴部正八位下 依知泰公干門

税領大初位下 依 知 泰 公

大初位下 依 知 泰 公

郷 長 若湯坐連

(紙面に影印21を捺す)

とある。池庄は大國郷に属し、愛知郡内においても、『近江愛知郡志』でいうように薬師の地名を求めることはできない。しかし、当該地は小字薬師堂、新林であることから、薬師堂にその名をあてることはできないであろうか。ただ、薬師安齊が大國郷に居住したのか、耕地を荘園として所有しそこに農業経営のため、農民を住まわせていたのか明らかではない。ともあれ、貞観三年(861)頃にムラかそれに準じる集落が存在していたと推察することは可能である。

調査は、文化財保護課が農林部耕地建設課より予算(3,330,000円)の再配当を受け、財団法人滋賀県文化財保護協会へ委託して実施した。調査および整理期間は昭和57年4月から昭和58年3月までとした。

なお、調査にあたっては湖東町教育委員会をはじめ、地元池庄の方々にも色々とお世話になった。ここに記し

て謝意を表します。



第1図 薬師堂遺跡位置図および周辺の遺跡(S=1/50000)

1. 薬師堂遺跡
2. ハツ塚古墳群
3. 上田遺跡
4. 高塚古墳群
5. 中岸木古墳群
6. 上岸木古墳群
7. 小田町古墳群
8. 勝堂古墳群
9. 平塚古墳
10. 小八木東古墳群
11. 小八木古墳群
12. 天神古墳
13. カイゴメ古墳
14. 平柳古墳群
15. 櫻田廃寺
16. 小八木廃寺
17. 菩提寺廃寺
18. 南菩提寺廃寺
19. 僧坊遺跡
20. 百濟寺遺跡
21. 木戸口遺跡
22. 愛知井跡

2. 位置と環境

薬師堂遺跡は、滋賀県愛知郡湖東町大字池庄地先に所在する。当地は愛知川によって形成された上位河岸段丘が、愛東町大字池之尻から北西方向にのびる先端部に位置し、扇状地をなしている。地形の傾斜度は調査の対象となった南東端と北西端の高低差は約6mをみる。標高は調査対象地の中央部で約145mを測る。

当遺跡周辺には古墳群がかなり多く分布する。南東約1kmの上位段丘上には八ツ塚古墳群8基、上田古墳群^①、南西約1.5kmの下位段丘上に高塚古墳群6基、中岸本古墳群10基、上岸本古墳群26基がある。西方約1.5kmには前方後円墳を含む小田町古墳群2基があり、北西約2kmには大円墳で構成される勝堂古墳群48基がそれぞれ位置する^②。各古墳群の主体部は横穴式石室とする後期古墳とみられ、愛知郡を本拠地とした愛智秦氏に関連するものと考えられている。

古代寺院跡では、北西約2kmに菩提寺遺跡、北東約2kmに僧坊遺跡、北東約3kmには鬼板を出土する小八木庵寺がある^③。さらに、愛知川町大字畑田には愛智秦氏の氏寺と考えられている畑田庵寺^④があり、古墳群の分布と合わせて検討すると興味ある寺院分布形態を呈している。

湖東町の周囲には荘園開発を究明するにも貴重な遺跡が多い。愛東町大字上岸本を井口として小田町から愛知川町大字畑田付近までのびる愛知井は、その灌漑地域に興福寺や東大寺の荘園が数多く分布し、後の愛知郡条里制地割の畦畔方位と異なる南北方位を採用している。愛知井周辺は奈良時代には初期荘園開発を済ませたところとされているが、在地豪族の分布形態や寺院跡の調査から、最近では白鳳期まで遡る可能性をもつとされている。

池庄は「大安寺資財帳」や「永源寺文書」によると、大安寺によって奈良時代から寺領としていたことを記している。

平安時代以降になると、皇族や延暦寺、日吉大社、春日大社等の荘園が現われ、延徳3間(1491)永源寺文書によると、池庄、小田町、大清水は永源寺の寺領となっている。ただ、『近江愛知郡志』では当地を12条5・6条に比定し、条里未施行地としている。

農地とするには用水の確保が必要である。比較的安定していた地域は愛知井の灌漑範囲のみとされ、当地を含めた段丘上は灌池や井戸による補水にたよらなければならない地域である。現に、当該地周辺には灌池や井戸の数が非常に多く、今日まで用水の確保に困難していたことを物語っている。



第2図 薬師堂遺跡測量図およびグリッド・トレンチ位置図

3. 調 査

1. 調査経過

本調査は、池庄工区約24 haを対象とし、排水路施行部分と任意に試掘用グリットを設定して、遺跡の範囲・性格等を追求した。さらに、検出した遺構の拡がりに基づいて、各グリット・トレンチを拡張することにした。

調査の基準点は、池場整備支線82号排水路を基準に、支線22号道路との交叉点を0点と定め、50m間隔に地区割をした。また、便宜的に各グリット・トレンチにA・B……Wの番号を付し、合計で23本設定した。(第2図)

A～Gトレンチからは、東から西方に蛇行しながらのびる河川跡を検出した。出土遺物からみると江戸時代に埋まったようである。現在、この河川跡の上層にはほぼ同位置を流れる小河川をみる。さらに、井戸の分布は河川跡付近に集中する。

Hトレンチには南南東から北北西にのびる溝があり、それを追求していった結果、溝の東側から独立柱建物3棟と樁跡、土塼を検出した。溝内からは平安時代前期の遺物が出土し、特に、独立柱建物を検出したところに集中する。

他のグリット・トレンチからは何ら遺構は検出されない。このことから、薬師堂遺跡の中心部はHトレンチ付近であると考えてよいであろう。

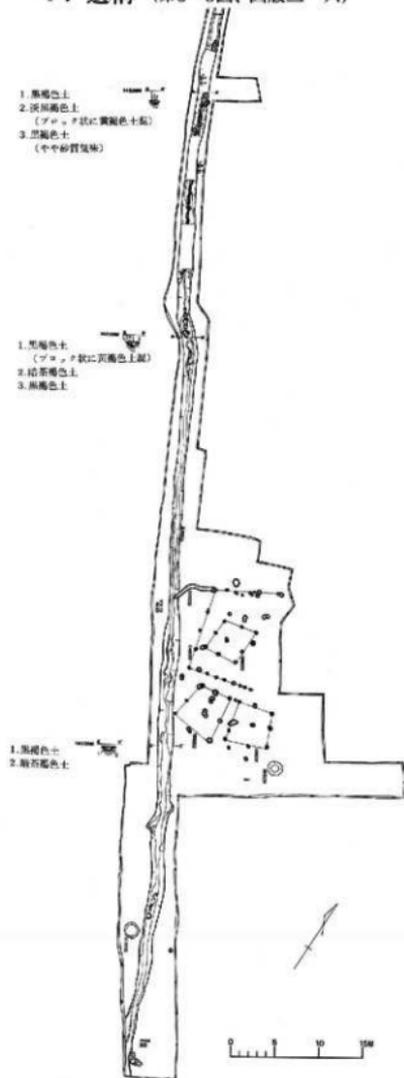
2. 調査日誌(抄)

昭和57年

- 4月19日 本日から薬師堂遺跡の発掘調査に入る。遠景写真撮影。基準点の設置。
- 4月20～22日 トレンチ・グリット設定と除草作業。
- 4月23日 A・Bトレンチ掘削。表土下0.3mにて地山面検出。旧井戸跡2基検出。
- 4月24日 C・Dトレンチ掘削。Cトレンチから河川跡検出。Cトレンチ拡張。河川幅は約21.5mである。
- 4月26日 E・Fトレンチ掘削。FトレンチからCトレンチからつづく河川跡を検出する。埋土から須恵器・土師器が出土する。
- 4月27・28日 Fトレンチ拡張と掘り下げ。幅は約15.7m、深さは約1.5mである。
- 4月30日 Gトレンチ掘削。河川跡の延長部検出。トレンチを拡張し河幅、深さを追求する。砂層と粘土層がレンズ状に堆積し、下部より湧水をみる。
- 5月3日 Gトレンチ拡張と掘り下げ作業。河幅約20.5mを測る。
- 5月4・5日 Hトレンチ掘削。表土下約0.5mから南北方向にのびる幅約1.2mの溝と土塼を検出する。
- 5月6日 I～Kトレンチ掘削。表土下約0.6mで地山面検出。遺構はない。
- 5月8日 Aトレンチ拡張。河川跡検出。
- 5月10・11日 B・C・Hトレンチ遺構検出作業。建物等の検出はみない。
- 5月12・13日 Hトレンチの溝を北へ追求。本日33mまで確認。溝の北側から柱穴数基検出する。
- 5月15・17日 溝をさらに北へ追求。長さ100mまで確認したところで、水田整地のため被掘され、溝は消滅する。

- 5月18日 L～Rグリット掘削。表土下0.5m位にて地山面を検出。遺構は検出されない。
- 5月19日 S～Wグリット掘削。遺構はない。
- 5月20～22日 Hトレンチの柱穴検出部分の追求と溝の掘り下げ作業。
- 5月24～31日 溝の掘り下げ作業。柱穴検出部分付近に遺物の出土が集中する。
- 6月1～7日 Gトレンチ河川跡掘り下げと写真撮影および実測作業。
- 6月8～10日 溝横の柱穴群追求。掘立柱建物6棟、橋跡であることが判明する。
- 6月11～17日 掘立柱建物掘り下げとA～Fトレンチ実測作業。
- 6月18日 地元の人々を対象に現地説明会。約40名見学。
- 6月19～23日 グリット・トレンチの平板測量（S1/500）。
- 6月24・25日 Hトレンチ実測用割に付け作業。
- 6月26～30日 Hトレンチ実測作業。
- 7月1日 現地調査を完了し、秦荘町矢守遺跡へ動具を運搬する。

4. 遺構 (第3~5図、図版二~六)



第3図 薬師堂遺跡Hトレンチ平面実測図

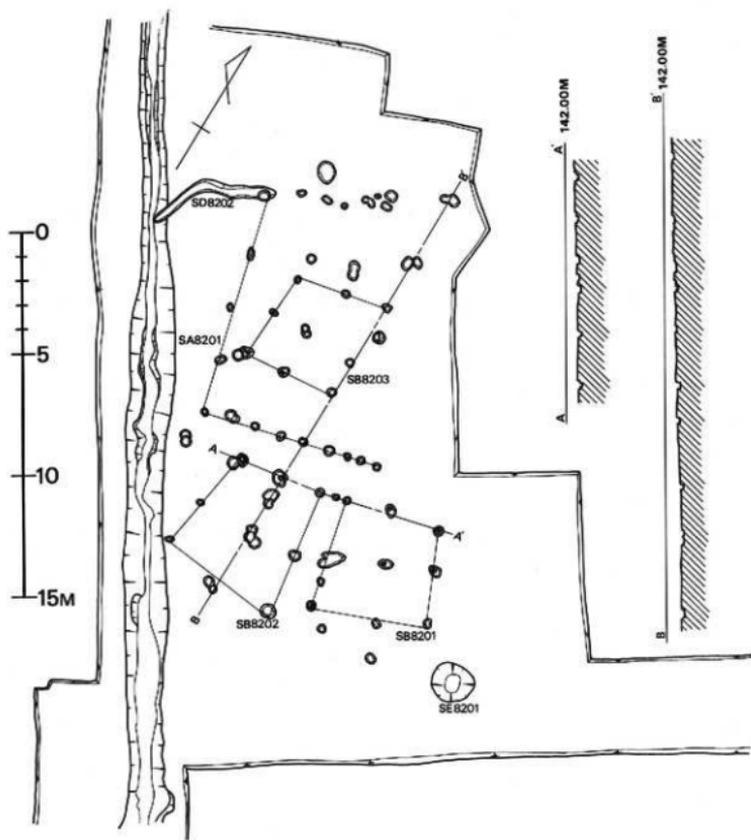
今回の調査では、Hトレンチから掘立柱建物3棟、櫓1条、井戸2基、溝2条と、A~Gトレンチから河川跡1条を検出した。

掘立柱建物

S B8201 桁行2間(4.0×4.5m)、梁行2間(3.9×4.7m)の総柱建物で、床面積は約18.28㎡を測る。柱穴は平面楕円形と円形を呈し掘形は0.4~0.6m、柱間は約0.15mである。柱間は桁行1.65~3.0m、梁行2.0~2.6mを測り、いづれも等間隔ではない。各柱列の柱筋はよく揃うものの建物の平面は台形に近い。建物の方位は西側柱列でN14°12'Eを示す。

S B8202 S B8201の東側1mにあり、北側の柱筋を一直線に揃え平行する建物である。桁行2間(4.4~5.4m)、梁行2間(3.5~5.0m)の総柱建物で、床面積は約20.83㎡の規模をもちS B8201より少し大きい。柱穴はすべて平面円形を呈し、掘形は直径0.2~0.6mを測り、西側柱列には柱直径と変わらないものもある。柱間は0.15~0.2mを測る。柱間は桁行2.0~2.6m、梁行1.7~2.6mと大きく異なる。この建物も各柱筋はよく通るが全体的な歪みをみる。中央の柱列と建物北西端の柱穴に重複する柱穴が存在するのは、歪みを少しでも修整しようとしたものであろうか。建物方位は東側柱列でN18°42'Eを示す。

S B8203 S B8202の北約4mにある建物で、3方を櫓によってコ字状に囲まれている。桁行2間(3.8×4.2m)、梁行2間(3.7m)、床面積約14.8㎡の規模をもつ。柱穴は平面円形を呈し、掘形は直径0.25~0.5m、柱直径は約0.15mを測る。この建物も各柱筋はよく通るものの、建物全体に歪みがあり平面菱形を呈する。柱間は桁行1.5~2.1m、梁行1.7~2.1mを測る。建物方位は西側柱列でN2°Wを示し、他の2棟より大きく東へ振る。



第4図 薬師堂遺跡掘立柱建物平面実測図

- | | | | |
|-----------------------|------------------------------|----------------------------------|------------------------|
| 1. 黒褐色土(層) | 8. 灰褐色砂層(鉄分多) | 15. 暗灰色砂層(ヤハク) | 22. 赤褐色砂層(黒砂・小石多) (金) |
| 2. 暗褐色砂層 | 9. 褐色砂層(砂利) | 16. 暗褐色砂層 | 23. 褐色砂層(土物多) |
| 3. 褐色砂層 | 10. 土質褐色砂層 | 17. 赤褐色砂層(鉄物・土物) | 24. 赤褐色砂層(黒砂・小石多) (黒砂) |
| 4. 淡褐色砂層 | 11. 砂土 | 18. 青褐色砂層(小礫多)やわらか | 25. 青褐色砂層(黒砂・やわらか) |
| 5. 淡褐色砂層 | 12. 淡褐色砂層(下層多) | 19. 褐色砂層 | 26. 褐色砂層(灰土物多) 下部腐食 |
| 6. 淡褐色砂層 | 13. 淡褐色砂層(砂利) | 20. 灰褐色砂層(上部多) | 27. 黒褐色砂層(灰) 下部腐食 |
| 7. 上部は褐色砂層
下部は褐色砂土 | 14. 淡褐色砂層
褐色砂層アソビ(10cm大)層 | 21. 灰褐色砂層
(75cm×20cm×40cm×10) | 28. 黄褐色土(腐食) 腐食 |



第5図 薬師堂遺跡GトレンチSR8201断面図

樁

S A8201 S B8203の南・西・北の3方をコ字状に囲む樁である。建物の方位とは一致せず、西側柱列でN14°10'Eを示し建物より約16度西に振る。南側柱列は長さ7.4m、西側柱列は9.1m、北側柱列は7.4mを測り、総延長で23.9mである。各接続するコーナは、南東部は直角に屈曲するのに対し、北西部は鈍角になる。柱穴は平面円形に近く、掘形の直径は0.2~0.5mを測り、柱痕は柱穴の深さが浅く明らかにできなかった。柱間は南側柱列は0.8~1.2m、西側柱列は2.3~2.5mで南側柱列の最大柱間の約2倍を測る。北側柱列は柱穴の方向・間隔は一定せず、他の2列と異なる。

井戸

S E8201 S B8201の南東約1.5mにある土壌で、位置・形態から井戸跡とした。平面は円形を呈し、直径1.8m、深さ0.6mを測り、底部は丸味をおびるが、少し凹凸する。内部には何ら施設は認められず、素掘のみであったようだ。遺物は土師器の細片が少量出土した程度である。

S E8202 建物群の南方約22mにある井戸跡で最近まで農業灌漑用として利用していたものである。平面は円形を呈し、直径1.7mを測り、深さについては調査に参加された地元作業員の話だと約5mはあると聞き、深くは追求しなかった。壁面は本来石を積んでいたが、埋め戻す時もち出せる石は取りのぞいたとのことである。

溝

S D8201 独立柱建物群の西側を南南東から北北西に流れる素掘りの溝で、ほぼ真っすぐにのびる。溝の南端は未検出であるが、北端は水田整地による被掘のため消滅する。検出した総延長は136.5mを測り、他方向にのびる支線はない。幅は上流で0.6m、建物群付近は1.5~2.0m、下流で1.0~1.5mを測る。深さは0.3~0.8mあり、断面形はU字とV字状部分があり、下流ほどV字部が多く底部はさらに切込む。建物より少し上流から建物付近にかけて小礫から拳大の礫が散在し、所々に人頭大の礫をみる。出土遺物は建物群付近に最も集中し、他からの出土量は少ない。溝の主軸は約N30°を示し、どの建物の方位とも合わない。

S D8202 S A8201の北西端の柱穴と重複し、S D8201までのびる溝である。遺構の重複関係からみると標とは直接関連するとは思われない。溝はゆるくL字状に曲り、長さ5.5m、幅0.45mを測り、壁面はほぼ垂直に落ち込み、深さは約0.5mである。

河川

S R8210 AトレンチからGトレンチにかけて検出された河川跡で、南東から北西方向へ大きく蛇行しながらのびる。河川幅は平均で20mあり、深さ2m以上を測る。河川の堆積土層は中央部に褐色系の砂礫層が堆積し、最後に埋った様子がうかがえる。その両側は黒褐色系の砂礫層で、徐々に河川の中央へ流れ込んだ堆積状況を呈する。下層は青灰色と褐色系の砂層がサンドイッチ状に堆積し所々に植物遺体を包含する。

河川はすでに埋っているが、この方向とはほぼ同位置に現在の小河川が流れ、それによって井戸が掘られ、また、ポンプ小屋もある。

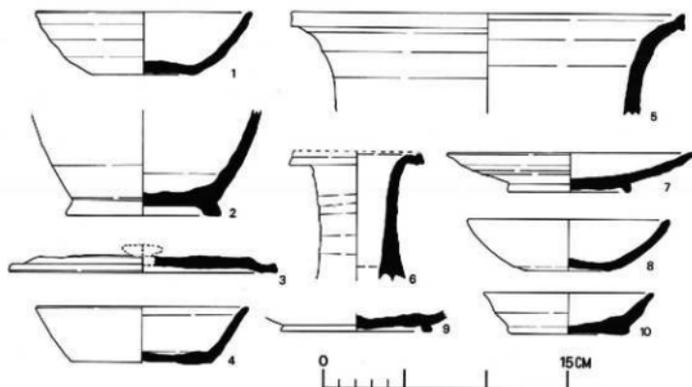
5. 遺物 (第6図、図版七)

今回の調査は広範囲におよんだが、遺構の検出されたのはHトレンチとA～Gトレンチのみであった。このため遺物の出土量は少なく、約100点を数えるのみである。その中で、実測可能なものは10数点で、ここではその代表的な10点について記述する。

S D8201 須恵器杯身(1)・壺(2)がある。1は内湾する口縁部と平底の底部からなる。内外面に横ナデ痕を残すが、底部は摩滅のため明らかでない。口径13.1cm、器高3.9cmを測る。胎土に石英粒を含み、焼成は軟質で淡黄褐色を呈する。2は壺の底部で、底部外周いっばいにやや外へふんばる高台をつける。胎土は精良、焼成堅緻で灰色を呈する。

Hトレンチ 須恵器杯蓋(3)・杯身(4)・壺(5)・壺(6)・灰釉陶器皿(7)・土師器杯身(8)が遺構面から出土した。杯蓋3は扁平な天井をもち、口縁部をS字状に屈曲さす。天井の約1/2をヘラ削りする。復元口径16.2cmを測る。胎土・焼成は良く淡灰色を呈する。4は平底の杯身で底部と口縁部との境界屈曲部は明瞭である。底部外面はヘラ切り後かくなる。口径12.8cm、器高3.4cmである。胎土は良く、焼成はやや軟質で淡灰色を呈する。5は壺の口縁部で端部を上下へつまむ。復元口径13.8cmを測る。胎土に長石粒を含み、焼成は良く灰色を呈する。6は小型の長頸壺の口頸部で、水瓶形を呈する。口縁端部を大きく外反させ、端部を上方へつまみ上げる。内外面ナデ痕を残す。胎土に長石粒を含み、焼成は良く淡灰色を呈する。7はやや内湾ぎみにのびる口縁部の端部を丸くおさめ、丸味のある高台をつける。復元口径14.3cm、器高2.4cmを測る。内面に淡緑色の釉がみられる。胎土は精良、焼成は良く、素地は灰白色を呈する。8は内湾する口縁部をもつ杯身で、内外面摩滅のため詳細は不明だが、横ナデ調整を施したものと思われる。復元口径12.0cm、器高3.1cmを測る。胎土は良く、赤色斑と石英粒をみる。焼成はやや軟質で橙褐色を呈する。

S R8201 須恵器杯身(9)、土師器杯身(10)がGトレンチの河川跡から出土した。9は底部のみ遺存する高台付杯身で、高台はわずかに外へふんばる。胎土・焼成とも良く淡灰色を呈する。10は胎土は土師質であるが緑釉陶器の未製品の可能性をもつ器である。口縁は外方へまっすぐのび、底部は外周を突起させる。底部外面



第6図 薬師堂遺跡出土遺物実測図

に糸切り痕を残す。口径10.2cm、器高2.5cmを測る。胎土は良く長石粒を含む。焼成は良く黄褐色を呈する。
つぎに上記の遺物について若干の年代的位置付けをしてみよう。

S D8201出土の2は壺(瓶)の底部で高台の形態、その貼り付ける位置の特徴は平城宮V期以降の性格であり、あえて述べるならS D650A⁶⁾に近似すると思われる。杯蓋3は天井の最も扁平するもので、平城宮VI期ないしS D650Aに相当し、榎木原編年V類第1段階⁷⁾に類例を求めることができる。また、6は榎木原遺跡ではIV類第3段階に外反させた口縁部の端部をつまみ上げるものが出現し、長岡京、平城宮VI期⁸⁾に相当する。8世紀末から9世紀初頭頃に比定される。灰釉陶器皿は比較的ていねいな器で、高台は低くて小さいが、また断面方形に近く、9世紀代の特徴をそなえているといえよう。土師器8は内湾する口縁部とナデ調整から、平城宮S D650Aに相当すると思われる。

6. ま と め

今回検出した遺構の中でHトレンチに位置する溝S D8201は村の中を流れる用水だけではなく、その方位から水田に伴う灌漑用水を兼ねていたと思われる。しかし方位は愛知井周辺でみられる南北地割を基準とする灌漑用水と一致しない。さらに、後述の愛知郡条里とも合わない。今回の調査では直接水田と関連する遺構は検出されなかったが、当地にも古い方位をもつ水田が存在していたことを示唆するものと思われる。

『近江愛知郡志』では当地を愛知郡条里未施行地帯としている。愛知郡条里とは水田の畔畔軸を約42度東に振るもので、南北地割の水田に対し、斜行条里制地割とよんでいる。今回の溝を水田に伴うものと考えれば、その時の開発は、たまたま地形の高低等の条件に合わせて開発されたため、愛知郡条里の方向と一致しなかったとみられる。それが後の大規模な開発により旧水田を包括し耕化されたため、旧水路は埋没したと思われる。

独立柱建物3棟はいずれも2間×2間の総柱建物で、床面積は14.8㎡から20.8㎡と規模は小さい。平安時代前期の律令制下の農村経営単位である家父長制的世帯共同体の村とされる草津市岡田追分遺跡では、倉とされる床面積は9㎡から25㎡の規模をもち、平均18.9㎡である。当遺跡の床面積平均値18.0㎡とはほぼ同値を示す。倉庫と考えてよい建物である。S B8203を取り囲む欄S A8201は、建物の方位と大きく異なるものの、他に建物はなく、S B8203に伴った欄とみてよい。建物の方位と欄とを揃えることはあまり意識しなかったであろう。

では、欄を伴う建物とそうではない建物との異いは何であろうか。今回の調査では、建物跡からの遺物の出土量は少なく、また、植物質を遺存する土質ではないことから遺物から各建物の性格を明らかにすることはできない。各建物の配置をみるとS B8201と8202は東西に接するようになり、S B8203はS B8202の北側に配され、3棟はL字状になる。ただ、主屋や副屋的な建物は検出されなかったことから、岡田追分遺跡6群^⑥のような全体構造を知ることはできない。しかし、井戸・溝さらに河川S R8201の位置関係から倉庫群の東側に主屋を中心とした建物群を推定することは可能と思われる。まず、考えられる倉庫の異いは、農村単位内で納める稲の異いである。すなわち、律令制支配下における租税は、口分田を班田された農民(公民)は田地1段あたり2束2把の田租が課せられていた。これは収権の3～5%にあたる。このことから、S B8203には租税として納める稲を入れ、S B8201および8202には雑物や自分達の稲を納めたと推測されよう。

さらに考えられることは、先に述べた薬師氏との関連で、薬師氏は貞観三年大國郡司の「解」により墾田を買っている。当然その土地を周辺に居住する農民と小作関係を結び、賃租経営を行なったとみられる。農民が土地所有者に納める年貢を入れた倉がS B8203であろうか。ただ、文献では田券の位置を13条11里と記し、『近江愛知郡志』で割り付けている当地の12条5・6条と大きな異いがある。条里の位置関係についての検討が必要である。

ともあれ、出土遺物から建物・溝は9世紀前葉から中頃に比定することができ、この時期の地方豪族は少しでも田地を増し、その地域を管理・運営権を得て、実質的な経営を行なおうとしている。これは律令制支配体制下の荘園制土地支配形態の変遷の現われとしてとらえられよう。言い換えれば、土地の私的所有の拡大であり、開発した田地あるいは買った墾田を後に免税とする不輸化への起源の形態と思われる。そして、それが11世紀以降密進地系荘園として、大寺院・大神社さらに中央貴族に寄進し、自らは荘園の荘官となってその土地を支配していったとみられる。初期荘園制度下における農村の様子を薬師堂遺跡に見ることができる。

註

- ① 葛野泰樹・山本一博『上田遺跡発掘調査報告書』（愛東町教育委員会（財）滋賀県文化財保護協会 昭和57年）
- ② 滋賀県教育委員会 昭和56年度『滋賀県遺跡目録』（昭和56年）
- ③ 近藤 滋「小八木庵寺発掘報告」（『滋賀県文化財調査年報』昭和49年度 滋賀県教育委員会 昭和51年）
- ④ 昭和53年発掘調査
- ⑤ 中野栄夫「近江国愛智荘故地における開発と灌漑」（『地方史研究』138号 昭和50年）
高橋敏一・小林健太郎「愛知川扇状地北半部の開発と条里」（『滋賀大学教育学部紀要』27号 滋賀大学教育学部 昭和52年）
葛野泰樹「愛知川流域の灌漑施設」（『滋賀文化財だより』№66号（財）滋賀県文化財保護協会 昭和57年）
- ⑥ 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』Ⅳ 昭和50年）
- ⑦ 林 博通・葛野泰樹『榎木原遺跡発掘調査報告』Ⅲ（滋賀県教育委員会（財）滋賀県文化財保護協会 昭和56年）
- ⑧ 奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告Ⅴ』（昭和51年）
- ⑨ 大橋信弥他「草津市追分岡田追分道跡調査報告Ⅰ」（『滋賀県文化財調査年報』昭和50年度滋賀県教育委員会 昭和52年）
大橋信弥「草津市追分岡田追分道跡調査報告Ⅱ」（『滋賀県文化財調査年報』昭和51年度 滋賀県教育委員会 昭和53年）



1 薬師堂遺跡遠景（東から）



2 薬師堂遺跡遠景（西から）



1 Hトレンチ 掘立柱建物・溝 (南から)



2 Hトレンチ掘立柱建物群 (東から)



1 SB8201・8202 (北から)



2 SB8203・SA8201 (東から)



1 S D 8201 (南から)



2 S D 8201 (北から)



1 Cトレンチ SR8201 (南東から)



2 Fトレンチ SR8201 (北西から)



1 Gトレンチ SR8201 (北から)



2 現地説明会風景



7



1



3



6



4



8

出土遺物



5

第3章 愛知郡秦莊町矢守遺跡

1. はじめに

本調査は、滋賀県が実施する県営ほ場整備事業（矢守第3工区）に伴うものである。矢守遺跡は以前から遺物の散布が知られており、東側隣接地に愛知川町市遺跡^①が、また、現矢守集落と重複するように矢守城遺跡がそれぞれ遺存する。しかし、遺跡の範囲・性格等についてはまだ明らかにされておらず、工事実施前に発掘調査を実施し遺跡の保存策を講じる必要となった。

ただ、遺物の分布範囲は小字鳥ノ倉付近に集中し、このあたりが遺跡の中心部と思われた。小字鳥ノ倉は約1町半四方（約150m）南北方向を基準とした畦畔を残し、その北西部は現在愛知川町大字市に含まれ、小字鳥ノ蔵と呼ばれている。鳥ノ倉の北側はいわゆる愛知郡条里と呼称されている条里制地割が遺存する地帯であり、その南側の所々に南北地割をみる。この傾向は隣接する市遺跡と同じであることから、現在は秦荘町と愛知川町に行政区画は分かれるものの、両遺跡は本来愛知郡大岡郷に属し、同一の一連した遺跡とみられる。

調査は文化財保護課が農林部耕地建設課より予算（2,220,000円）の再配当をうけ、財団法人滋賀県文化財保護協会へ委託して実施した。調査・整理期間は昭和57年7月～昭和58年3月までとした。

なお、この調査にあたっては秦荘町教育委員会をはじめ地元矢守の方々にお世話になった。ここに記して謝意を表します。

2. 位置と環境

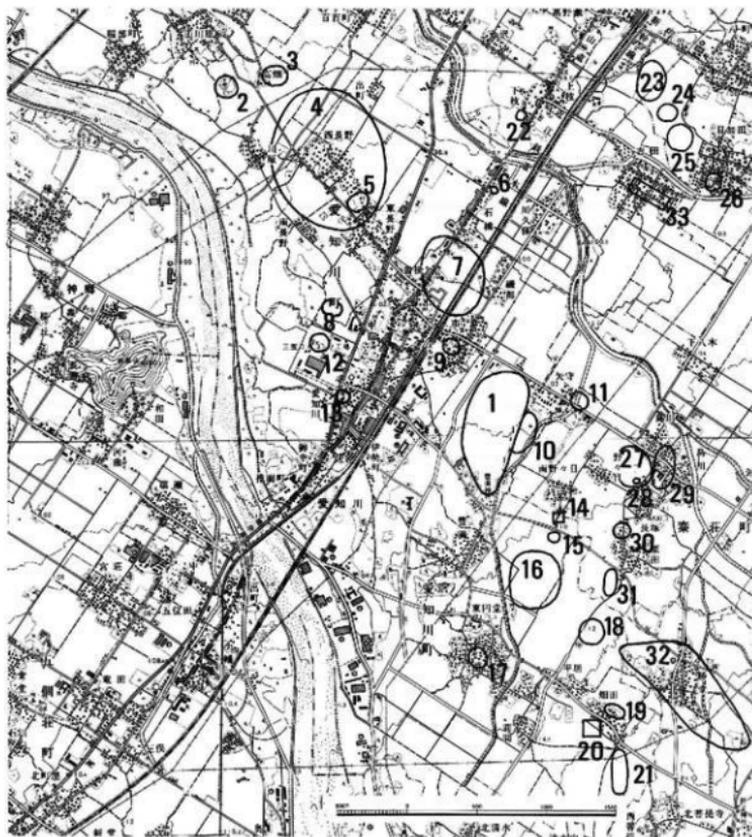
矢守遺跡は、滋賀県愛知郡秦荘町大字矢守に所在し、一部は大字南野々目にかかる。該当する現存小字は鳥ノ倉・三段長で約10,000㎡の広さをもつ遺跡と考えられている。

当地は湖東平野のほぼ中央部に位置し、鈴鹿山脈から琵琶湖へ流れる愛知川と宇曾川との中間にある。このため、当該地は両河川によって形成された沖積平野を呈し、標高は約106mを測る。現在、全域水田として開墾され、北側は愛知郡条里制地割の水田地帯で、南側は南北方向に主軸をもつ水田とそれより少し東へ振る畦畔の水田地帯である。ちなみに『近江愛知郡志』では当地を7条10里・8条10里に比定している。

当遺跡の周辺に分布する遺跡の中で南北地割をもつものは、古代寺院跡と集落跡があり、また、愛知川町大字畑田に広がる愛知井の灌漑範囲の水田などがある^②。寺院跡は南から畑田庵寺、野々目庵寺、小八木庵寺、妙園寺庵寺、軽野庵寺、日加田庵寺等を上げられる。集落跡は愛知郡八木郷に伴う地方官衙と推定されている大間寺遺跡がある。これらは1町から2町四方の方格地割をもち、白鳳期から平安時代の遺跡と考えられている。

古墳時代では、塚原古墳^③、栗田古墳群^④と前方後円墳の可能性をもつ長塚古墳が東方約2kmにあり、その東側に約300基の円墳で構成されている金剛寺野古墳群^⑤と48基の大円墳で構成されている勝堂古墳群がある。集落跡は6世紀前葉の遺物を出土する軽野正埴遺跡^⑥がある。

隣接する市遺跡は昭和57年10月から、遺跡推定地の南端で調査が実施され、12世紀中頃に比定されるムラの一部が明らかにされた。また、その北側の小字鳥ノ蔵・中島からは古墳時代後期から平安時代の遺物を採取されており、市遺跡は古墳時代からつづく集落と考えられている。さらに、当遺跡の西方には奈良時代から平安時代の遺物の散布する番掛遺跡、西長野遺跡等が旧東山道をはさんで分布する。いまだ明らかにされていない愛知郡衙を想起させられる遺跡である。



第1図 矢守遺跡位置図および周辺の遺跡

1. 市道跡 2. 興禅院遺跡 3. 狐塚遺跡 4. 西長野遺跡 5. 福泉寺遺跡 6. 山塚遺跡
 7. 寄掛遺跡 8. 久遠寺遺跡 9. 市城遺跡 10. 矢守遺跡 11. 矢守城遺跡 12. 御嘉遺跡
 13. 宝満寺遺跡 14. 野々目庵寺 15. 塚原遺跡 16. ミグルシ遺跡 17. 東円堂遺跡 18. 平厩北遺跡
 19. 畑田北遺跡 20. 畑田庵寺 21. 畑田稲荷遺跡 22. 観音堂遺跡 23. 古戸遺跡 24. 目加田遺跡
 25. 竹ノ尻遺跡 26. 目加田庵寺 27. 大間寺遺跡 28. 長塚遺跡 29. 島川遺跡
 30. 栗田城遺跡 32. 勝堂遺跡 33. 吉田城遺跡



第2図 矢守遺跡測量図および調査範囲図

3. 調 査

1. 調査経過

昭和57年度の調査は、矢守第2工区約4.5 haを対象とし、排水路施行部分と任意にグリットを設定し遺跡の範囲・性格等を追求した。さらに、検出した遺構の拡がりによって、各グリット・トレンチを拡張し遺構を明らかにすることにした。

調査の基準点は第2号小排水路と第8号支線道路の交叉点を定め、南西にのびる第2号小排水路の中心線を基準に50m間隔に地区割を行なった。さらに、便宜的に各グリット・トレンチにA・B～Qと番号を付した。グリット・トレンチは合計で17本設定し、遺構・遺物の確認されたB・Cトレンチ、H・I・Kグリットを拡張した。(第2図)

遺構はBトレンチ拡張部で掘立柱建物4棟と土壇5基を検出した。掘立柱建物は主軸をすべて南北方向にそろえ、規格性のある配置をもつ。土壇はいづれも多量の土師器をもち、平面不定形を呈する。ただ、1基のみ内部に柱穴の伴うものがあり、また、土壇基を想起させるものがある。

今回調査を実施した地区の基本土層は、Bトレンチから北側は0.3～0.4mで砂礫層の地山面となり、遺構は検出されない。それより南側は淡褐色系の粘質土層で遺構をみる。このことから、北側にある愛知郡糸里施行地域に入ると遺構は確認されない。

2. 調査日誌(抄)

昭和57年

7月1日 薬師堂遺跡から発掘調査器材一式搬入。テント設置、遠景写真撮影。

7月2～3日 調査用基準点設置および地区割作業。

7月5～6日 A～Dトレンチ設定と除草作業。

7月7～8日 Aトレンチ掘削。表土下約0.5mで地山層確認。遺構の検出ならず。

7月9日 Bトレンチ掘削。表土下0.2mに遺物包含層があり約0.4mで柱穴を検出する。柱穴はほぼ南北方向に並び、大きな掘立柱建物となるもよう。

7月11日 Cトレンチ掘削。表土下0.2～0.4mは遺物包含層となり、約0.4mで地山になる。数個の柱穴を検出する。

7月12～13日 Dトレンチ掘削。表上下0.4～0.5mに遺物包含層を、0.5mで柱穴をみる。

7月15日 Fトレンチ掘削。表土下0.5mで南北に並び柱穴を検出。溝もある。任意にグリットを設定。

7月16～20日 Eトレンチ、G～Kグリット掘削。Hグリットで焼土・柱穴検出。Kグリットで溝を検出。

7月21日 小字島ノ倉の北東コーナー部分にトレンチを設定する。方格地割を裏づける遺構は明



第3図 矢守遺跡Aトレンチ耕土掘削作業風景

らかにできない。

7月22・23日 A・Bトレンチ断面実測作業。北東コーナー部分トレンチ追求。表土下約0.3mで砂礫層となり遺構はない。トレンチを南側へ拡張しB・Cトレンチとつなぐ。

7月24・25日 Kグリット追求。溝は南西から北東にのびるものと、東西方向にのびる2条がある。L～Qグリット掘削。

7月26～29日 Bトレンチ東側拡張。東西棟建物1棟とその南側からも掘立柱建物検出する。

7月30・31日 掘立柱建物の北東部に土師器を多量に含む土壌数基を検出する。C・Dトレンチ追求。

8月2～7日 Bトレンチ拡張部追求。さらに2棟の掘立柱建物検出。すべて南北方向を基準し、総柱建物である。

8月9～12日 拡張部追求。柱穴掘り下げと土壌群清掃および写真撮影。

8月17～21日 掘立柱建物の柱穴掘り下げ作業。

8月23・24日 掘立柱建物清掃と写真撮影および、実測用割り付け作業。

8月25・26日 Dトレンチ追求と写真撮影。グリット・トレンチ平板測量作業（S = 1 / 500 8月28日まで）

8月27・28日 Fトレンチ追求と写真撮影および実測作業。

8月30・31日 Bトレンチ拡張部実測作業。

9月1日 調査を完了し、器材搬出作業。

4. 遺 構 (第4~6図、図版二~九)

今回の調査で検出した遺構は掘立柱建物7棟、櫓1条、土塙5基、溝18条等と数基の柱穴である。この中で掘立柱建物と土塙はBトレンチ拡張部に集中し、小字烏ノ倉の方格地割判定範囲内にある。溝は主にC・E・Kトレンチから多く検出された。ここでは各遺構ごとに説明することにする。

掘立柱建物

S B8201 Bトレンチ拡張部の中央部にある建物で、桁行7間(14.5、15.3m)、梁行3間(6.8m)の南北棟建物である。建物内には東柱があり総柱建物を呈する。柱間は桁行1.8~2.3m、梁行1.5~3mあり、平均寸法は桁行2.15m、梁行2.27mを測る。柱穴はすべて平面円形を呈し、掘形径0.4~0.65m、柱径径は0.2~0.25mである。方位はN11°30'Eを示し、各柱筋はよく通るものの柱間にばらつきをみせることから少し歪みがある。床面積は約101.32㎡あり、今回検出した建物の中では最も規模の大きい建物である。

S B8202 S B8201の東側に位置し、S B8201の東側第1列線上にS B8202の南西限の柱穴がのる。桁行3間(5.75m)、梁行2間(4.1m)の南北棟建物で総柱建物にはならないようだ。建物の北側第1列の柱穴2基は最近の井戸による被掘のため消滅する。柱間は桁行1.7~2.2m、梁行1.9~2.3mを測り、平均すれば桁行1.92m、梁行2.05mとなる。床面積は約23.58㎡である。柱穴は平面円形を呈し、掘形径0.3~0.55m、柱径径0.15~0.2mを測る。方位はN23°30'Eを示し、今回検出した建物の中で最も西に振る。

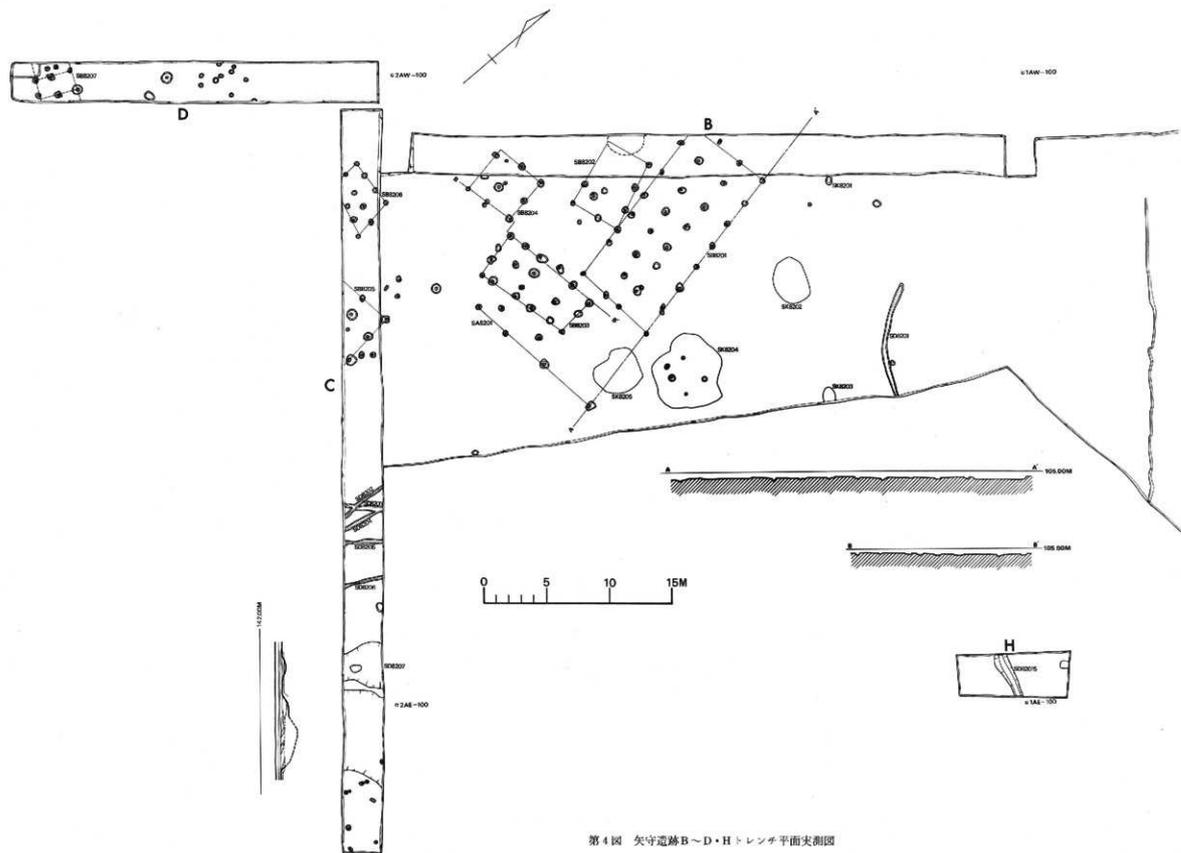
S B8203 S B8201の南側にL字状に配置された東西棟建物で、S B8201とは1.2mの間隔でしかない。桁行は5間(7.75、8.3m)、梁行は東半分は2間(3.1m)、西半分は3間(3.9m)となる。東柱は有るところと無いところがある。柱間は桁行、梁行とも1.5~2.0mを測る。柱穴は平面円形と楕円形とがあり、掘形径は0.3~0.75m、柱径径は0.2~0.25mを測る。方位はN15°Eを示し、床面積は約28.11㎡である。

S B8204 S B8203の北東にあり、S B8201、8203との配置関係をみればコ字状になる。規模は南北2間(3.75m)、東西2間(4.1m)の総柱建物であり、わずかに東西方向に長い。柱間は南北1.8~2.0m、東西1.8~2.3mを測り、平均柱間は1.88mと2.05mになる。柱穴の平面形は東側第1列の2基のみ長方形を呈し、他は円形である。掘形径は0.3~0.6m、柱径径0.2mを測る。方位はN9°30'Eを示し、床面積は約15.38㎡をもつ。普遍的な倉庫建物である。

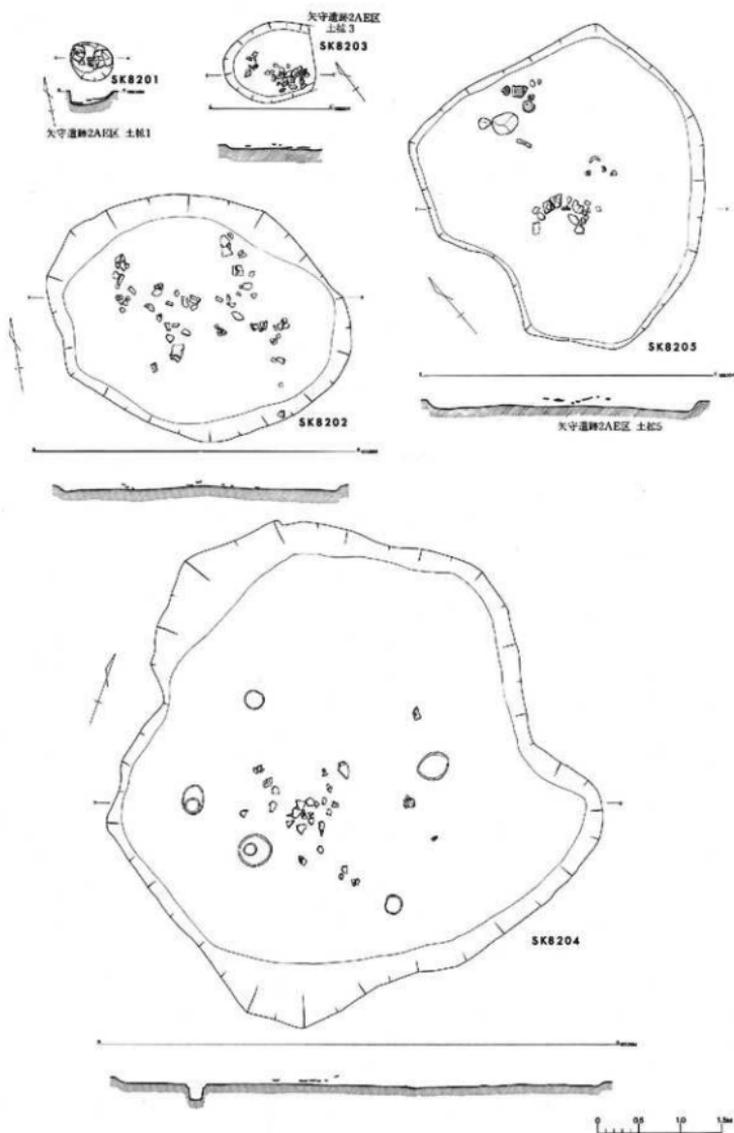
S B8205 S B8203の南方約8mのCトレンチから検出された建物で、南北2間以上(4.4m以上)、東西1間以上(2.5m以上)を測る。柱間は南北2~2.4m、柱穴は平面円形を呈し、掘形径0.4~0.75m、柱径径0.15~0.25mである。方位はN7°30'Eを示す。この建物もおそらく総柱建物になると思われる。

矢守遺跡掘立柱建物一覧表

建物番号	桁行×梁行(間)	規 模 (m)	床面積(㎡)	方 位	備 考
S B 8 2 0 1	7 × 3	14.5 15.3 × 6.8	101.32	N 11° 30' E	
S B 8 2 0 2	3 × 2	5.75 × 4.1	23.58	N 23° 30' E	
S B 8 2 0 3	5 × 2(3)	7.75 × 3.1 8.3 × 3.9	28.11	N 15° E	
S B 8 2 0 4	2 × 2	4.1 × 3.75	15.38	N 9° 30' E	
S B 8 2 0 5	2以上 × 1以上	4.4以上 × 2.5以上	11以上	N 7° 30' E	
S B 8 2 0 6	3 × 2	4 × 2.5 4.5 × 3.3	12.33	N 9° 30' E	建物の長大
S B 8 2 0 7	1以上 × 2	1.6以上 × 3.0	4.8以上	N 26 W	東柱のみ方形



第4図 矢守遺跡B~D・Hトレンチ平面実測図



第5图 矢守遺跡 SK8201~8205平面実測図

S B8206 S B8204の南西約6.5mにある東西棟建物で、桁行3間(4.0、4.5m)、梁行2間(2.5、3.3m)の規模をもつ。柱間は桁行1.2~2.0m、梁行1.4~1.9mを測り、各柱筋はよく通るが建物全体の歪みは大きい。柱穴は平面円形を呈し、掘形の直径0.3~0.5mと比較的まとまる。柱径は0.2mである。方位はN 9°30' Eを示しS B8204と同値である。床面積は12.33㎡である。

S B8207 Dトレンチの南西限から検出された建物おそらく東西棟建物になる。桁行1間以上(1.6m)、梁行2間(3.0m)で、柱間は梁行の北側が1.7m、南側が1.2mと0.5mの違いをみる。柱穴の平面形は東柱のみ1辺0.5mの方形を呈し、他は直径0.3~0.8mの円形である。柱径は直径0.2~0.25mを測る。方位はN 26°Wを示し、他の建物と比して大きく東へ振る。

槽

S K8201 S B8203の南側約2.5mに建物とはほぼ平行する槽で、方位はN 82°30' Wを示し東西方向に主軸をもつ。規模は3間(11.7m)あり、柱間は3.0~4.9mを測り東側へ徐々に広がる。柱穴の平面形は円形と方形とがあり、東側の柱穴のみ方形を呈する。掘形の直径は0.4~0.6m、方形掘形は0.5×0.75mを測り、柱径は0.2~0.3mである。

土 墳

S K8201 S B8201の北西約5mにある楕円形の土墳で、長辺0.51m、短辺0.45m、深さ0.15mを測り、底部は丸味をおび土師器片が包含されている。

S K8202 S K8201の南約7mにある楕円形の土墳である。長辺3.6m、短辺2.65mを測り、深さは浅く約0.1mである。土墳中央部に土師器片が多量にある。

S K8203 S K8202の南東約7mにある楕円形の土墳で、長辺1.2m以上、短辺1.1m、深さ約0.1mを測り、底部は丸味をおびる。この土墳内からも多量の土師器片が出土した。

S K8204 S K8202の南約7mにあり、平面形は不定形である。規模は今回検出した土墳の中で最も大きく径約5.5mを測る。深さは約0.1mと浅い。土墳中央部に土師器片が集中する。なお、土墳内から5基の柱穴を検出したが、土墳との前後関係を明らかにすることはできなかった。

S K8205 S K8204の南東約1mにある円形の土墳で、直径約0.3mを測る。この土墳から土師器が多量に出土する。

溝

S D8201 Bトレンチ北梁部から検出された溝で、建物群の東約15mにある。溝は曲線をえがき北西から東方にのびる。長さ9.2m以上、幅約0.4m、深さ約0.2mを測り断面U字形を呈する。

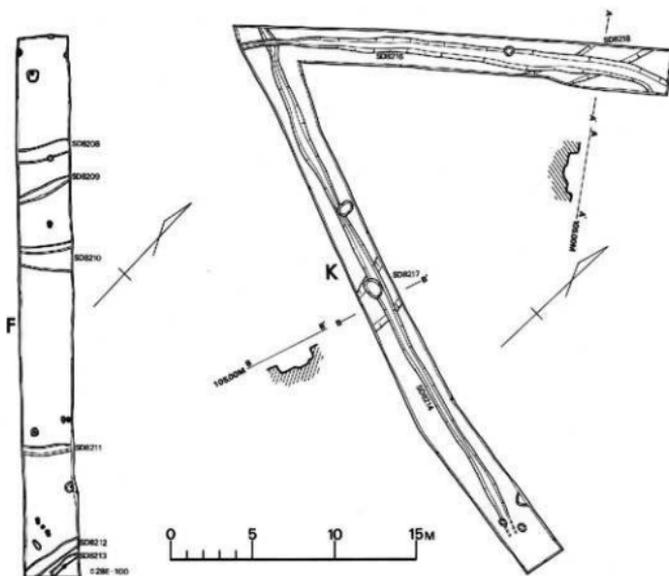
S D8202 Cトレンチ南東部から検出された細い溝で、南から北へのびる。長さ4m以上、幅0.25m、深さ約0.1mを測る。溝の南部でS D8203と重複するが、前後関係は明らかではない。

S D8203 S D8202と重複する溝で、南西から北東へのびる。長さ3m以上、幅約0.35m、深さ約0.1mを測る。溝の北東部でS D8204と重複しS D8204を切る。

S D8204 S D8203と重複し、S D8202とはほぼ平行する。長さ3m以上、幅0.35m、深さ約0.15mを測り、北側はS D8203に切られる。この溝と平行するS D8202を同時期とみるならば、ともにS D8203より先行すると思われる。

S D8205 S D8203の南東約5.5mにある溝で、南西から北東へのびる。方位はS D8203より少し西に振る。長さ3m以上、幅約0.3m、深さ約0.1mを測る。

S D8206 S D8205の南東約3mにあり、南南西から北北東へのびる。長さ3.2m以上、幅0.25m、深さ約



第6図 矢守遺跡F・Kトレンチ平面実測図

0.1mである。

S D8207 S D8206の南東約5mにある大溝で、河川跡とみられる。溝は大きく北西部と南東部に分かれ、北西部幅は2~3.5m、南東部幅6.5~7mとなる。全体で約11mの幅を測る。深さは最深部で約1.2mあり青灰色砂層と褐色系粘質土層とがサンドイッチに堆積する。

S D8208 Fトレンチから検出された溝で南南西から北北東へのびる。長さ3.2m以上、幅0.8m、深さ約0.2mを測る。

S D8209 S D8208の南東約2mをS D8208とはほぼ平行して流れる溝で、長さ3.5m以上、幅約0.5m、深さ約0.15mを測る。

S D8210 S D8209の南東約3mを南西から北東へのび、南東側の壁が2段に落ち込む。長さ3.3m以上、幅は1段目1.0~1.7m、2段目0.4mを測る。深さは0.2mである。

S D8211 S D8210の南東約12mにあり、南西から北東へのびる。長さ3m以上、幅約0.5m、深さ約0.2mを測る。

S D8212 Fトレンチの南東限から検出された。南から北へのび、長さ4m以上、幅約0.6m、深さ約0.4mを測る。

S D8213 S D8212のすぐ東側を平行して流れる溝である。長さ2m以上、幅約0.3m、深さ約0.1mである。

S D8214・8215 S D8215はHトレンチから検出され、その東方約19mにKトレンチのS D8214がある。方向は西北西から東南東にのび、同一の溝とみられる。両溝の長さはS D8214は33.5m、8215は4mあり、総延長約56.5mを測る。幅は0.5~1.0m、深さは約0.2mで断面U字形を呈する。

なお、S D8215の西側延長線上にS D8201があり、S D8201、8214、8215は同一の溝と考えられる。ちなみに、総延長は87.7mになる。

S D8216 S D8214の南西部を切る溝で、南西から北東へのびる。長さ26m以上、幅0.3～1.2mあり、S D8214との重複部のみ細くなる。深さは約0.3mで断面U字形を呈する。

S D8217・8218 S D8217はS D8214と重複し、S D8218はS D8216と重複する。ともに、南から北にのび、同一の溝である。長さは22m以上、幅1.7～2.7mを測る。

5. 遺物 (第7・9図、図版十～十二)

今回の調査では弥生土器、古式土師器、土師器、須恵器の土器類と石鏃の出土をみた。以下、遺構に伴った遺物を中心に記述する。

掘立柱建物、各建物から多くの土器が出土したが、すべて細片で実測可能なものは数点である。S B8021の柱穴から須恵器杯身(1)が出土した。立ち上りは短く、よく内傾する。胎土、焼成は良く、黒灰色を呈する。

S K8201 土師器壺(2)・甕(26)がある。2は短かくて外反する口縁頸部と球状の体部からなる丸底の壺で、口径9.6cm、復元器高約7.5cmを測る。体部の内外面にハケ目調整を施す。胎土に石英を含み、焼成は良く橙褐色を呈する。26はいわゆる近江型の甕で、口縁部を内寄させ端部に内傾する面をもつ。肩は張らず口縁径と変わらない。体部内外面にハケ目調整し、口縁部は内面をハケ目調整、外面をなでる。口径19.8cmを測る。胎土に細砂を含み、焼成は軟質で淡赤褐色を呈する。

S K8202 須恵器杯蓋(3)、土師器甕(4～6)、把手(7)がある。3は口縁部と天井部の境界の段・段はなく、天井部の丸い蓋である。口縁先端は丸くおさめる。天井部の約1/2をへら削りする。口径11.8cm、器高約3.8cmを測る。胎土に黒色斑文がみられ、焼成は良く灰白色を呈する。

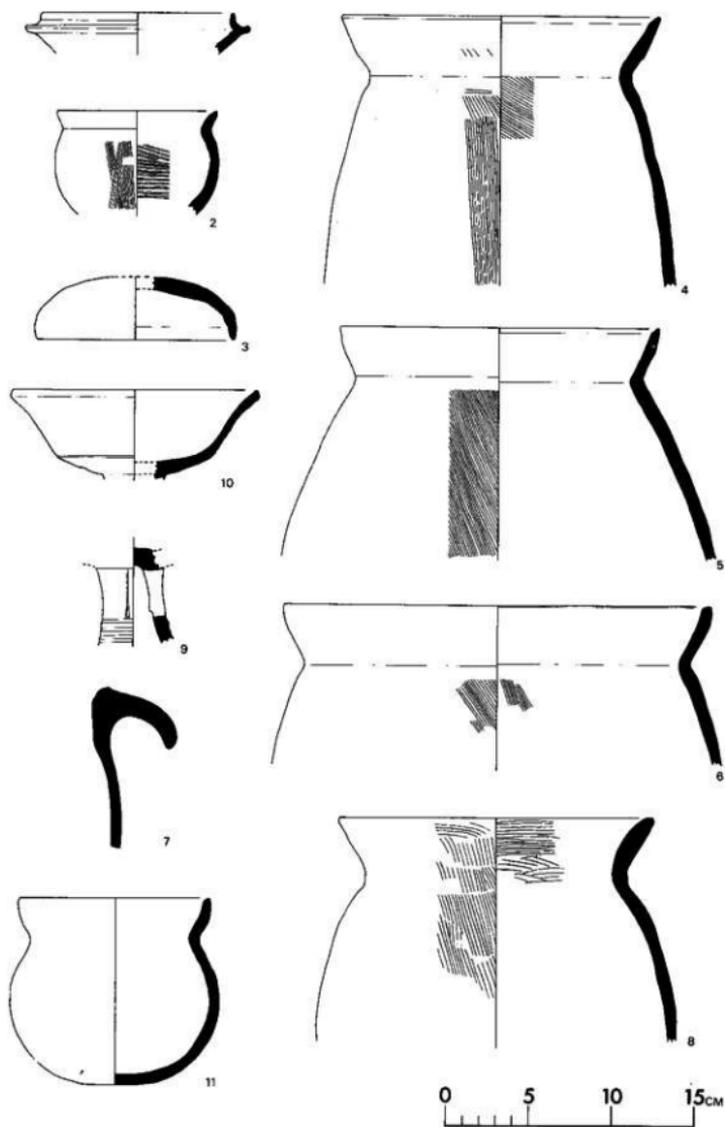
4は頸部を丸く屈曲させ、口縁部は外上方へのび、体部の肩は張らない。体部の内外面にハケ目調整し、口縁部外面はハケ目調整後なでる。口径19.0cmを測る。胎土に砂粒を多く含み、焼成はよく赤褐色を呈する。5はく字状に屈曲する口頭部の口縁端部に内傾する面をもち、体部の肩は張らず、体部の最大径は下位にある。体部外面はハケ目調整し、内面をへら削りする。胎土に石英を含み、焼成は良く淡赤褐色を呈する。外面の一部は黒褐色である。6は内湾する口縁部の端部に面をもつものである。口径約26cmを測る。体部の内外面にハケ目調整する。胎土に砂粒を含み、焼成は軟質で淡赤褐色を呈する。7は把手のみ遺存し、端部はよく垂下する。体部内面にハケ目調整をみる。

S K8203 土師器甕(8)がある。口縁部の内面側を肥厚させ、先端を丸くおさめる。体部外面と口縁部内面をハケ目調整し、体部内面はへら削りの可能性がある。胎土にやや大粒の砂粒を含み、焼成はやや軟質で淡黄褐色を呈する。

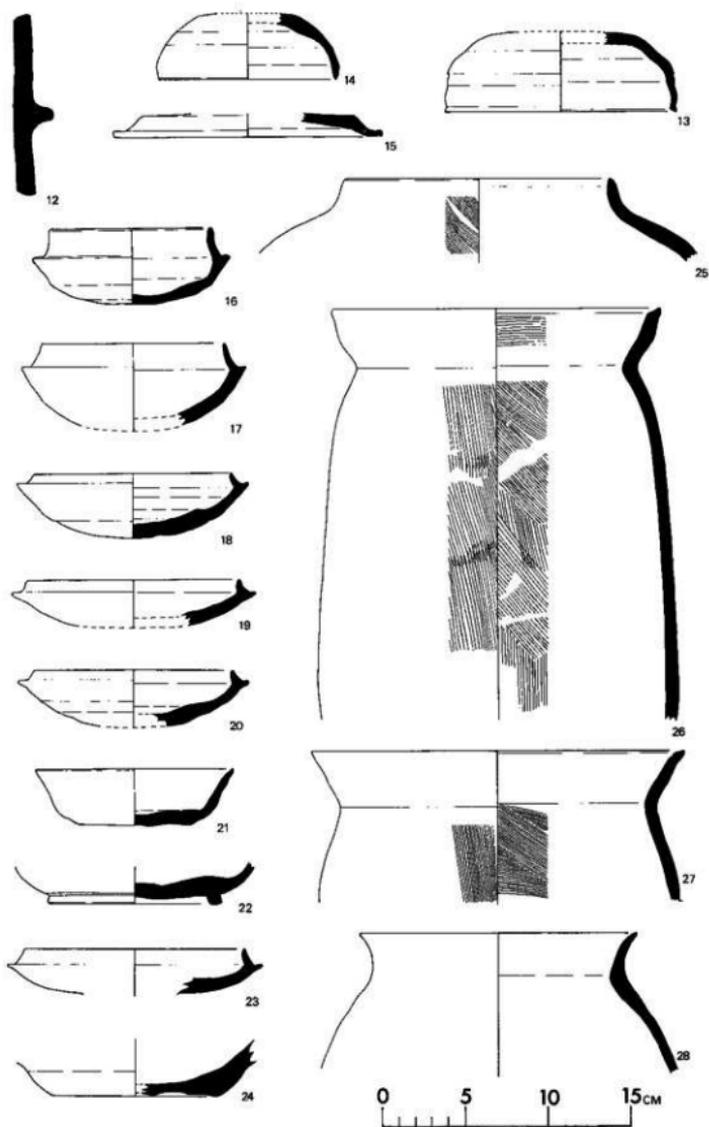
S K8204 須恵器高杯(9)、土師器高杯(10)・壺(11)・甕(12)がある。9は脚柱部のみ遺存するもので、上下2段に3方向のスカシを穿ち、その中間に3条の凹線をめぐらす。スカシはへらで細く切り込む程度である。胎土に石英を含み、焼成は堅緻で暗紫色を呈する。10は杯部のみ遺存する高杯で、底部と口縁部との境界に段がめぐる。口縁部はよく外反し、端部に面をもつ。口径14.7cmを測る。胎土に石英を含み、焼成は良く淡赤褐色である。11は内湾する口縁部と球状の体部からなる丸底壺である。外面はへら研磨を施すが磨減のため明らかではない。口径11.3cm、器高11.4cmを測る。胎土は良く、焼成は軟質で淡茶褐色を呈する。12は体部のみ遺存するもので、外面に壇輪状の凸帯を付ける。外面に細いハケ目調整を施す。胎土に砂粒を含み、焼成は軟質で淡赤褐色を呈する。

掘立柱建物上層出土遺物 須恵器杯蓋(13～15)・杯身(16～22)・高杯(23)・壺(24)・土師器壺(25)・甕(27～29)・鉢(30)・高杯(31・32)がある。

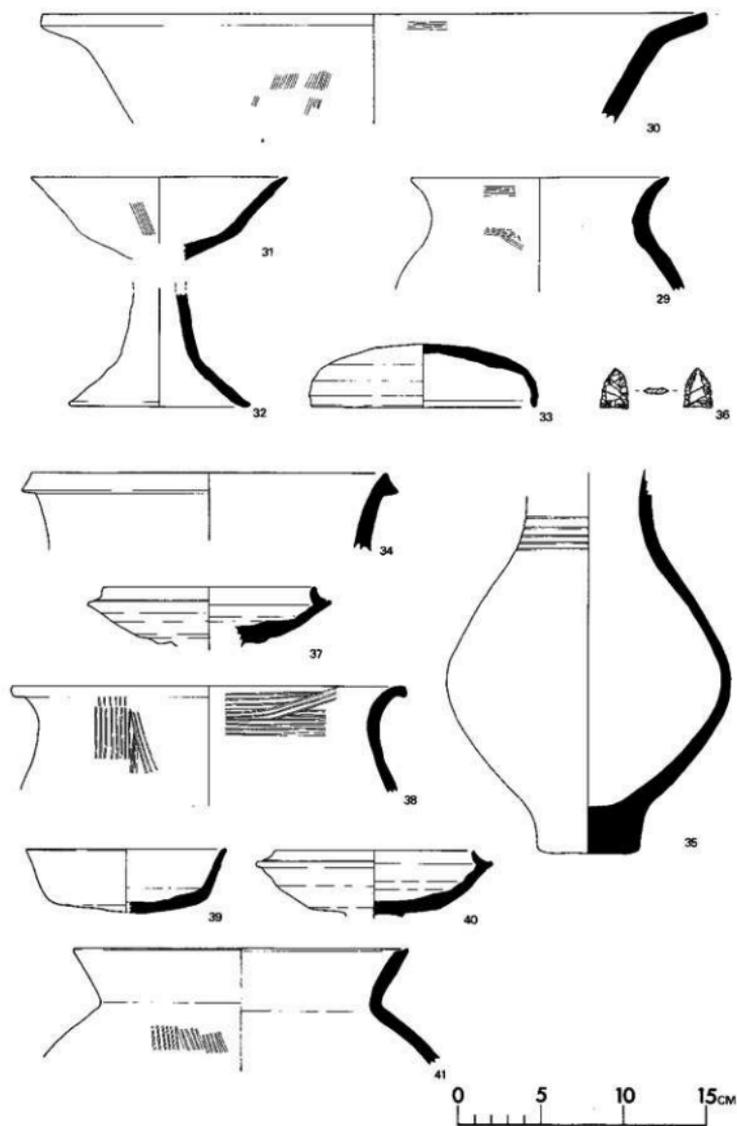
13は口縁部と天井部の境界に段をもち、口縁端部に内傾する面をもつもので、天井部の約1/3をへら削りする。口径14.0cm、器高約5cmを測る。胎土は精良、焼成は堅緻で灰白色を呈する。14は口縁部と天井部の境界を丸くおさめるもので、口縁端部は尖りぎみである。天井部の約1/4は未調整でへら切り痕を残す。復元



第7图 出土遗物实测图(1)



第8图 出土器物实测图(2)



第9图 出土遺物実測図(3)

口径10.6cm, 器高4.0cmを測る。胎土に細砂粒を含み, 焼成は良く灰白色を呈する。15は口縁部の端部をごくわずかに垂下させるもので, 天井部の約1/2をヘラ削りする。胎土は良く, 焼成は堅緻で灰白色を呈する。16~20は立ち上りをもつ杯身で, 16はよく立ち上り, 先端を丸くおさめる。底部外面の約1/2をヘラ削りする。口径9.5cm, 器高4.6cmを測る。胎土に微砂粒を含み, 焼成は良く灰白色を呈する。17は内傾する立ち上りの先端を尖りきみにし, 底部は丸味をもつ。胎土にやや大粒の石英を含み, 焼成は良く暗灰色を呈する。18~20の立ち上りは短く, よく内傾する。いずれも器高比数は低い。18は底部の約1/3をヘラ削りする。口径12.0cm, 器高4.9cmを測る。胎土, 焼成はよく白灰色を呈する。19・20は胎土に微砂粒を含み, 焼成はやや不良で淡褐色を呈する。21は平底の杯身で口縁部をやや外反さす。底部外面の中央部にヘラ切り痕を残す。口径12.0cm, 器高3.4cmを測る。胎土に石英を含み, 焼成は良く灰白色を呈する。22は高台付杯身で, 高台は低いか外方へふんばる。底部外面はヘラ切りのままである。胎土に砂粒を含み, 焼成は良く灰白色を呈する。23は有蓋高杯の杯部のみ遺存するものである。立ち上りはよく内傾し, 器高は低い。胎土に石英を含み, 焼成は良く淡灰色を呈する。24は壺の底部とみられるもので, 底部は平底を呈し, 器壁は薄い。胎土に微砂粒を多く含み, 焼成は良く明白灰色を呈する。

25の口頸部はゆるいカーブをえがいて立ち上り, 先端は尖る。外面に荒いハケ目調整を施し, 口縁部と体部の一部にスガが付着する。胎土に砂粒を含み, 焼成は良く淡黄褐色を呈する。

27~29は肩の張らない壺で, 口縁部を外反させる。27は体部の内外面をハケ目調整する。29は外面をハケ目調整し, 内面は摩滅のため不明である。胎土は27に石英が認められ, 他は大粒の砂粒を含む。焼成はともに軟質で, 色調は27は灰褐色, 28・29は淡褐色を呈する。30は鉢の口頸部で, 口縁部は外方へのびる。体部外面と口縁部内面をハケ目調整する。口径は約40cmを測る。胎土に石英を含み, 焼成はやや軟質で明褐色を呈する。31・32は高杯の破片で, 31の杯部は体部と口縁部の境界に段をもち, 口縁部を外反させる。口径15.4cmを測る。32は下位を屈曲させる脚部である。調整はともに摩滅のため明らかではない。胎土・焼成は良く赤褐色を呈する。

Bトレンチ出土遺物 遺物包含層から須恵器杯蓋(33・43)・壺(34), 土師器壺(42)などが出土した。33は天井部に丸味をもち, 口縁端部を外方へわずかにつまみ出すもので, 天井部の約1/4はヘラ削りする。口径13.4cm, 器高3.8cmを測る。胎土に石英を含み, 焼成は良く灰白色を呈する。43は口縁端部を垂下させるもので, 天井部は扁平である。天井の約1/2をヘラ削りする。胎土に砂粒, 石英を含み, 焼成は良く白灰色を呈する。34は口縁端部を外方へ折りまげ, 先端を尖す。胎土に石英を含み, 焼成は堅緻で暗灰色を呈する。42はいわゆる近江型の壺の体部で, 内外面細いハケ目をていねいに施す。胎土に砂粒を多く含み, 焼成はやや軟質で, 淡黄褐色を呈する。

Dトレンチ出土遺物 遺物包含層から弥生土器壺(35), 石罫(36)などが出土した。35は頸部に5条の凹線をめぐらす。体部最大径はほぼ中位にあり, 底部は平底で器壁は他と比して非常に厚い。体部内外面はヘラ研磨と思われるが摩滅のため明らかではない。胎土に砂粒を多く含み, 焼成はやや軟質で暗赤褐色を呈する。36は平面二等辺三角形に近い石罫で, 長さ2.4cm, 底径1.6cm, 厚さ0.2cmを測る。石材はチャート質で, 光沢のある暗黒褐色を呈し, 斜方向に白色の脈が数条はしる。

Eトレンチ出土遺物 遺物包含層から須恵器高杯(37), 弥生土器壺(38)などが出土した。37は杯部のみ遺存するもので, 形態は23と似る。脚部の直径は杯部との接続痕から約4cmを測る。胎土, 焼成は良く暗灰色を呈する。38は口縁部を丸く外反させるもので, 口縁端部も丸くおさめる。肩は張らない。内外面を太くて荒いハケ目調整を施す。胎土に砂粒を含み, 焼成は良く淡褐色を呈する。

Fトレンチ出土遺物 遺物包含層から須恵器杯身(39)・高杯(40)・甕(41)などが出土した。39は平底の杯身で、口縁部はわずかに外反し、底部は丸味をもち外面は未調整である。口径12.0cm、器高3.8cmを測る。胎土に砂粒を多く含み、焼成は良く灰白色を呈する。40は23・27より器高は少し高く、内外面に横ナデ痕を良く残す。胎土、焼成とも良く、暗灰色を呈する。41はく字状に屈曲する口頸部をもち、口縁端部に内傾する面をもつ。体部外面はタタキ調整を施し、内面はナデ調整である。胎土に石英を含み、焼成は良く白灰色を呈する。

6. ま と め

今回の調査の結果、小字島、倉地区から掘立柱建物が7棟検出された。建物は柱穴の重複関係、方位などから大きく3群にわけられそれが時期差を示しているといえる。

I群とされる建物はS B8021, 8203~8206の5棟、II群はS B8202、III群はS B8207である。この中でIII群としたS B8207は東柱のみ方形を呈し東西に建物がのびることから他と異なる性格をもつとみられる。その位置は鳥、倉の南辺側の東部の位置に相当し、門跡と推定されるものである。このことから、I・II群とは方位を異にするがどちらかの群に属するものと考えられる。

建物の時期については柱穴出土遺物に6世紀後半から7世紀初頭の細片が含まれ、古墳時代後期に属する建物の可能性をもつ。しかし、耕作土床面直下から検出されたこれら遺構は土壌以外、時期決定に躊躇する。床工等からは比較的時期の新しい遺物も出土し、今後調査が計画されている愛知川町市遺跡に含まれる鳥ノ蔵の結果を待って判断したい。なお、古墳時代後期の掘立柱建物群の類例としては、守山市赤野井遺跡^③がある。I群(6世紀後半)、II群(7世紀前半)、III~V群(8世紀前半~9世紀後半)の5群のうちI・IIがそれで、屯倉の性格をもつと推定されている。また、7世紀中葉頃の群構成(I群)をみる美園遺跡^④は高島郡の地方官衙として比定されている。このことは、早くから渡来人が居住し開発された当郡においても、上記のような官衙的要素をもつ遺跡の存在を想起することができる。

矢守遺跡は市遺跡を含めて『和名称』で言う愛知郡大國郷に比定でき、大國郷の西郷境は中山道(旧東山道)に想定されることから、大國郷は愛知郡の中心部に位置していたといえる。中山道の近くには、未だ明らかでない愛知郡衙を求めることができ当遺跡の位置は愛知郡でも重要な所であったとみられる。その中樞部が鳥、倉(蔵)ではなかったか。

現在、大國郷には野々目庵寺と畑田庵寺の2寺が確認され、畑田庵寺は隣接する勝堂古墳群との関係から、当群に本拠をかまえた愛智秦氏の氏寺として、野々目庵寺は大國郷の大國寺伝承の寺院に比定することも可能である。当遺跡と野々目庵寺は位置的關係から本来包括される遺跡としてとらえることができ、その相関関係を解明することが、当遺跡の性格を明らかにする鍵であるといえる。

ともあれ、当遺跡は弥生時代から古墳時代後期、更には市遺跡第一次調査で確認された12世紀中頃の掘立柱建物の存在は、遺跡と当地に人々が生活をした証しである。また、遺跡の北側に存在する愛知郡条里制地割の水田や建物の検出されない地区から検出されるであろう南北地割をもつ畦畔は、愛知郡における古代から中世に亘る村落の経営状態を如実にあらわしたものとして注目される。

註

- ① 葛野泰樹・徳綱克己「市遺跡発掘調査概要」I (愛知川町教育委員会 (財)滋賀県文化財保護協会 昭和58年)
- ② 中野栄夫「近江国愛智荘故地における開発と灌漑」(『地方史研究』138号 昭和50年)
- 高橋誠・小林健太郎「愛知川流域地北半部の開発と条里」(『滋賀大学教育学部紀要』27号 滋賀大学教育学部 昭和52年)
- 葛野泰樹「愛知川流域の灌漑施設」(『滋賀文化財だより』№66号 (財)滋賀県文化財保護協会 昭和57年)
- ③ 昭和53年発掘調査
- ④ 近藤 滋「荏荏町野々口遺跡」(『ほつち郷関係遺跡発掘調査報告書』V 滋賀県教育委員会 (財)滋賀県文化財保護協会 昭和53年)

- ⑤ 近藤 滋「小八木庵寺調査報告」(『滋賀県文化財調査年報』昭和49年度 滋賀県教育委員会 昭和51年)
- ⑥ 昭和53年度発掘調査(第1次調査)
第2次調査 本書掲書第Ⅱ章
- ⑦ 昭和53年度発掘調査
- ⑧ 葛野泰樹・山中仁志『大間寺遺跡発掘調査報告書』(滋賀県教育委員会(財)滋賀県文化財保護協会 昭和57年)
- ⑨ 昭和53年度発掘調査
- ⑩ 昭和53年度発掘調査
- ⑪ 田中勝弘・近藤 滋「愛知郡森荘町コクヲ教地内古墳調査報告」(『滋賀県文化財調査年報』昭和48年度 滋賀県教育委員会 昭和50年)
近藤 滋「森荘町上教野古墳群」(『発掘整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅳ-Ⅱ 滋賀県教育委員会(財)滋賀県文化財保護協会 昭和52年)
近藤 滋・藤川清文「森荘町上教野古墳群」(『発掘整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅴ 滋賀県教育委員会(財)滋賀県文化財保護協会 昭和53年)
- ⑫ 近藤 滋・石橋正嗣・石原道洋『野野正境遺跡発掘調査報告書』(森荘町教育委員会 昭和54年)
- ⑬ 山崎秀二他「守山市赤野井遺跡」(『滋賀県文化財調査年報』昭和51年度 滋賀県教育委員会 昭和53年)
- ⑭ 林 博通・松浦俊和・宮成良佐・葛野泰樹『美園遺跡発掘調査報告』(滋賀県教育委員会(財)滋賀県文化財保護協会 昭和50年)



1 矢守遺跡調査地遠景（東から）



2 矢守遺跡調査地遠景（南西から）



1 Bトレンチ 掘立柱建物群 (南から)



2 Bトレンチ 掘立柱建物群 (北東から)



1 Bトレンチ 掘立柱建物群 (北から)



2 Bトレンチ SB8204 (南から)



1 Cトレンチ SB8206 (北から)



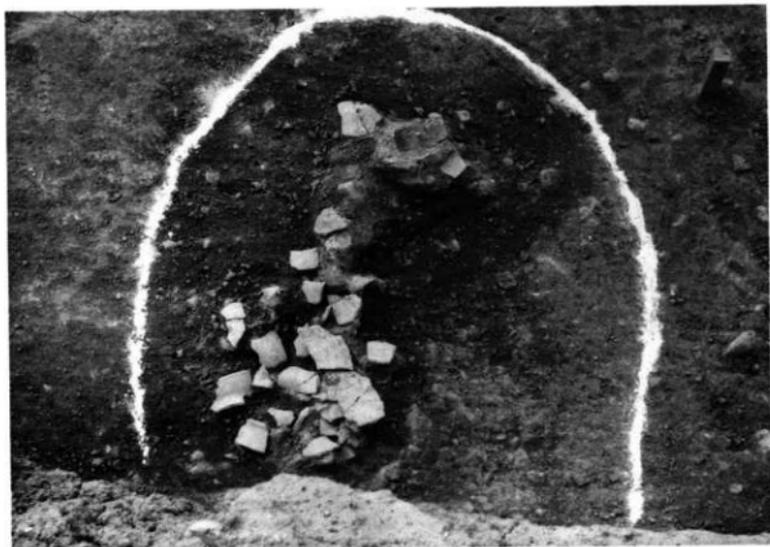
2 Cトレンチ SB8205 (北から)



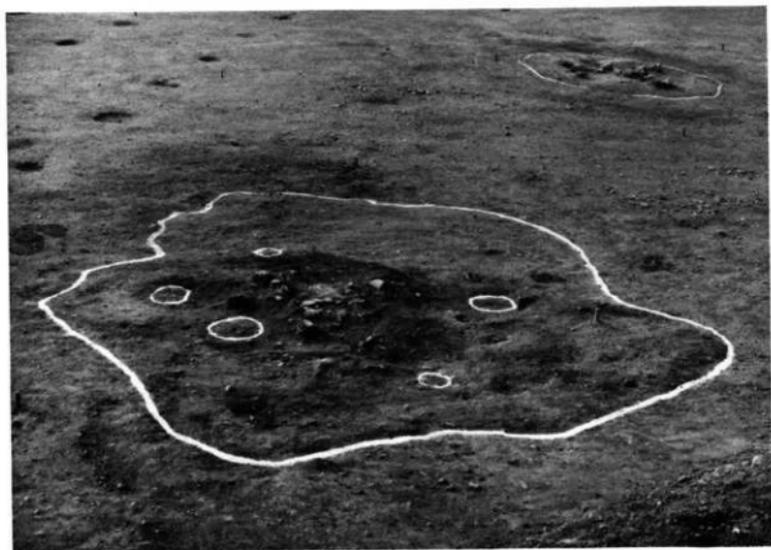
1 Dトレンチ SB 8207 (南から)



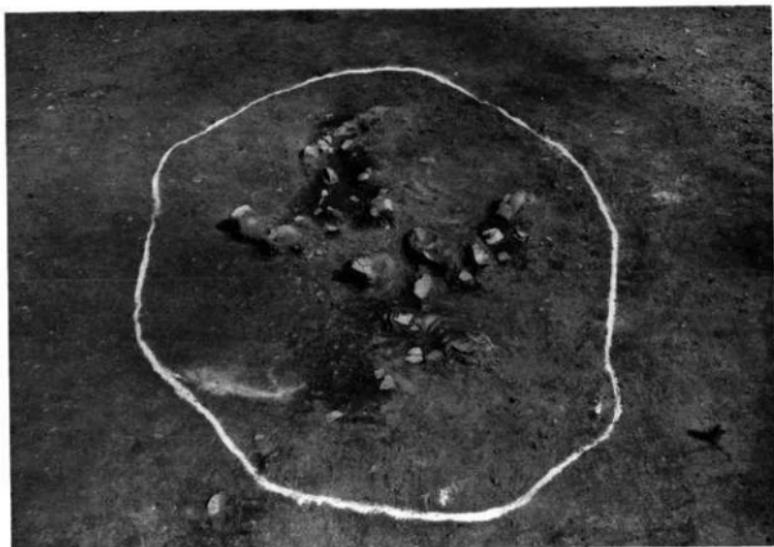
2 Bトレンチ SK 8201 (南から)



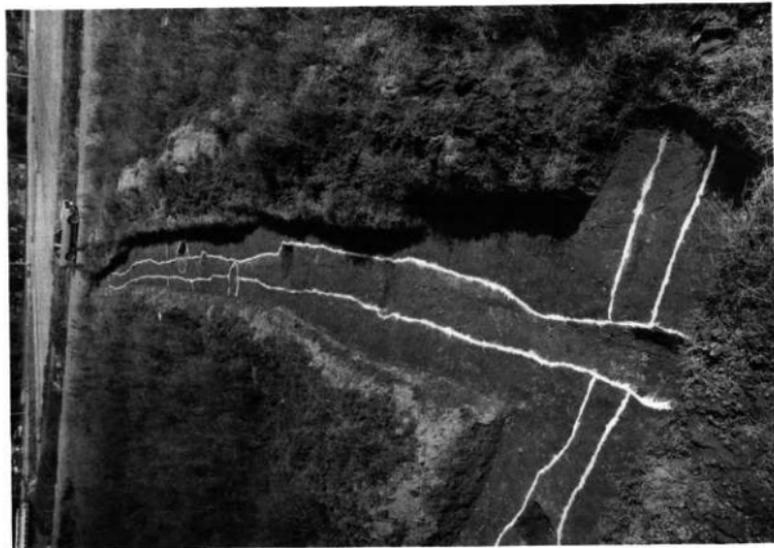
1 Bトレンチ SK8203 (東から)



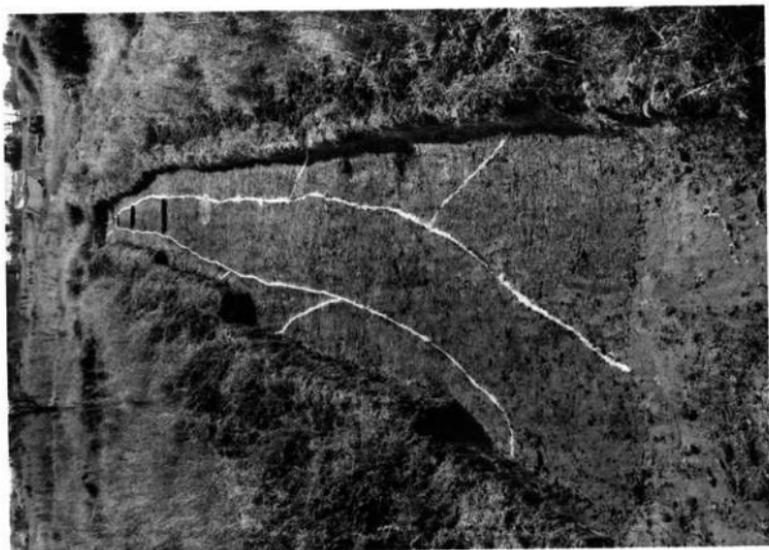
2 Bトレンチ SK8204 (南から)



1 Bトレンチ SK8205 (南から)



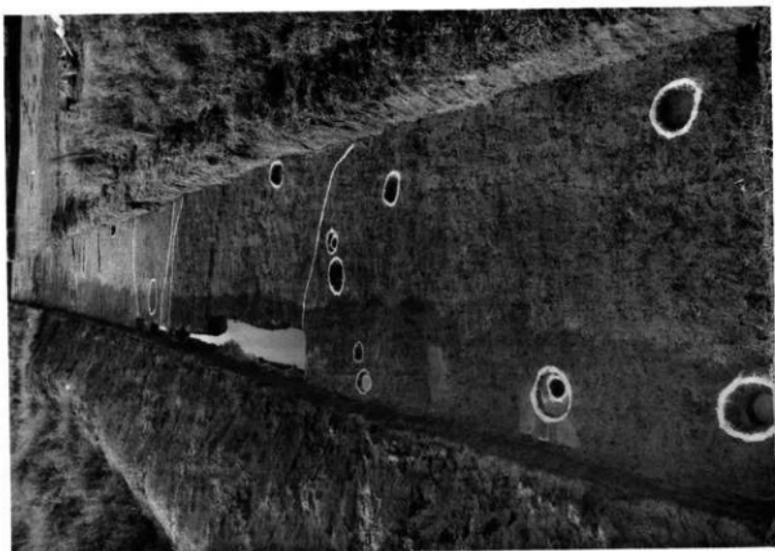
2 Kグリット SD8214 (東から)



1 Kグリップ SD82216・82218 (北東から)



2 D444444 (西側から)



1 Cトレンチ (西側から)



2 Cトレンチ 母塚部 (南東から)

10



2



11



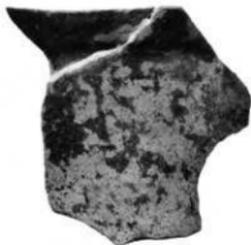
4



12



5



15

43



8

18



33



26



29



35



36



30



31



32



42



第4章 愛知郡秦莊町輕野遺跡

1. はじめに

本調査は、滋賀県が実施する県営は場整備事業暗渠排水工事（蚊野工区）に伴うものである。蚊野遺跡は古から瓦の出土が知られ、また、小字に塔ノ塚をみることから『近江愛知郡志』には「丘地（塔ノ塚）の南方、水田中に一巨石ありて古寺全盛時代の塔の礎石なるを掘めたり、依て丘地に入り草を分けて土中を探りにしに優秀なる唐草瓦の破片や平瓦の破片を発見したり。（中略）昔時七堂伽藍の大刹簷之しを葺す。」と記述し、寺院の存在を示唆していた。当該地には愛知郡で遺存する古代寺院跡と同じく、南北方向を基準とした方格地割が残っており、そこが蚊野塔ノ塚廃寺の推定地とされていた。

昭和53年度ここには場整備事業が実施されることになり、同年水路予定地と削平部分を中心に発掘調査が行なわれた。その結果、寺域の西と南を画する溝と南門（3×2間）が検出された。しかし、北東限を西する施設や主要伽藍部分は未確認に終り、寺院の構造は明らかにされていない。ただ、出土遺物に大量の瓦が含まれ白鳳期から鎌倉時代にかけてのものであることが判明した。

この調査によって、塔推定地は現状で保存し、寺域内は削平をさけることで遺跡の保存がはかられた。

しかし、今回の暗渠工事は前回保存をした主要伽藍部分にも工事を行われることになり、事前に発掘調査を実施し遺跡の保存策を講じることにした。

調査は文化財保護課が県農林部耕地建設課より予算（4,440,000円）の再配当をうけ、財団法人滋賀県文化財保護協会へ委託して実施した。調査・整理期間は昭和57年10月から昭和58年3月までとした。

なお、この調査にあたっては秦荘町教育委員会をはじめ地元の方々にお世話になった。さらに、瓦類の整理・報告については西田 弘先生に多くの御教示を得た。ここに記して謝意を表します。



第1図 軽野遺跡位置図およびその周辺の遺跡(S=1/50000)

1. 軽野遺跡
2. 妙園寺跡
3. 小八木庵寺
4. 目加田庵寺
5. 野々田庵寺
6. 畑田庵寺
7. 頼恩寺遺跡
8. 常安寺遺跡
9. 光林寺遺跡
10. 金台寺遺跡
11. 西明寺遺跡
12. 金剛輪寺遺跡
13. 軽野正境遺跡
14. 大間寺遺跡
15. 市・矢守遺跡
16. 市・矢守遺跡島ノ藏地区
17. 二子塚古墳
18. 金剛寺野古墳群
19. 平柳古墳群
20. 長塚古墳
21. 塚原古墳
22. 栗田古墳群
23. 勝堂古墳群
24. 高坪山遺跡
25. 斧磨遺跡
26. 愛知井跡

2. 位置と環境

軽野遺跡は滋賀県愛知郡秦荘町大字軽野・蚊野に所在する。古から寺院跡と推定されていた遺跡で、寺域は1.5町から2町四方の規模を有した大寺院と考えられている。創建期はこれまでの調査によって白鳳期に比定され、鎌倉時代まで存続していたとされている。

当地は宇曾川の右岸に位置し、宇曾川によって形成された扇状地の中位にあたる。かつては扇状地を地形にみあったように開墾していた水田の影環を眺望できたのであるが、今は大規模な場整備事業によって、画一化された水田形態をみる。ただ、地形が扇状地であるため、現在の水田も一筆づつ西側へ段々状に形成され、往時の地形をそこに彷彿させられる。しかし、現地形からは当時の小字名や畦畔を追求することはできない。

軽野遺跡はこのように区画整備された水田の中に拡がり、塔跡として推定されている1区画(30m四方)のみ緑地公園として保存され、遺跡の説明板も設置されている。

当遺跡の周辺には南北方向を基準とする方格地割をもった寺院跡や集落跡がある。寺院跡では北から目加田院寺^①、妙園寺院寺、小八木院寺^②、野々目院寺^③、畑田院寺^④がそれぞれ、1町ないし2町四方の寺域をもつ。これら諸寺院は愛知郡内に居住した渡来系氏族愛智秦氏や軽野氏と緊密な関係にある氏寺に相当するものと郡寺的性格をおびたものがある。しかし、今のところどの寺院をそれに比定するか明らかになっていない。

ただ、当遺跡に隣接する蚊野には軽野神社が鎮座し、大字名に軽野の名をみることができ、さらに、宇曾川右岸堤には当郡最大の規模をはこる金剛寺野古墳群(約300基)^⑤が位置することから、当遺跡を軽野氏と関連づけ、また、畑田院寺はこれまでの調査によって2町四方の寺域をもつ大寺院であることが判明し、「秦」と銘記した墨書土器の出土、さらに、隣接地に大円墳で構成される勝堂古墳群(48基)が遺存することなどから、畑田院寺を愛知郡の鎌、愛智秦氏と関連づける説がある。そして、大國寺伝承のある寺院を野々目院寺に求め、郡寺をそれに比定づけることも可能ならしめている。いづれにしても、今は推定の域を脱しきれず今後の調査、研究が必要である。

集落跡では、当遺跡の北東部に毛入堂遺跡^⑥が隣接し、6世紀後半から12世紀中頃にかけての遺物の出土をみる。南方約1kmには6世紀前葉の堅穴住居で構成された軽野正境遺跡^⑦があり、宇曾川対岸には地方官衙と考えられている大間寺遺跡^⑧がある。その西方約1kmには本報告書にも掲載した矢守遺跡^⑨と市遺跡^⑩がある。大間寺遺跡、市・矢守遺跡とも1町から2町四方の方格地割をもち、上記の寺院との相関関係が注目される。



第2図 輕野遺跡調査範圍圖

3. 調 査

1. 調査経過

昭和57年度の調査は、蚊野工区約4.5 haを対象とした。調査は暗渠排水溝布設工事のため排水溝予定地にトレンチを設定し遺構の有無を確かめた。(第2図)

調査用基準点は第3図のように定め、各トレンチを便宜的に1A-1・2……、1B-1・2……、2A-1・2……、2B-1・2……と番号を付した。トレンチは合計で27本設定し、遺構の確認された1B-1、7トレンチを拡張した。(第3図)

検出された遺構は1B-1トレンチで礎石、瓦列、溝、瓦敷整地層、1B-7トレンチで瓦窯2基と柱穴である。その他には5本のトレンチからは場整備の実施される昭和53年まで存続していた河川跡を検出したのみで、直接寺院に関連づけられる遺構は検出されず、伽藍配置を明らかにする資料は得られなかった。

遺物としては、1B-1トレンチから大量の瓦類の出土をみた。瓦類には完形の軒平瓦もある。瓦窯からは灰原も含めて、遺構の遺存度の低さから遺物の出土量は少なかった。

2. 調査日誌(抄)

昭和57年

10月4日 本日から発掘調査を開始する。調査地遠景写真撮影および調査地踏査。

10月5～9日 1A・B区基準杭設定作業。

10月12～16日 2A・B区基準杭設定作業。

10月18～21日 1B区トレンチ設定作業。

10月22日 1B-1トレンチ掘削作業。表土下0.5～0.7mから大量の瓦と礫、溝検出。

10月23日 1B-1トレンチ北東部掘削。心礎とみられる礎石を検出。



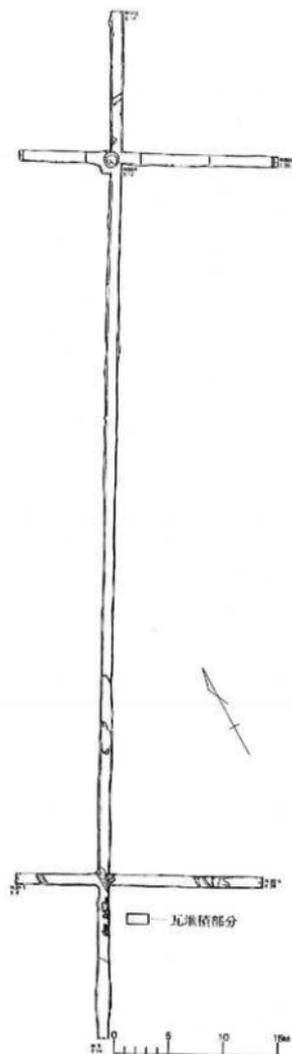
第4図 暗渠排水工事状況



第5図 1B-1トレンチ調査状況

- 10月25・26日 1B-2・3トレンチ掘削。2トレンチでは表土下0.2~0.3mで地山層をみる。瓦の出土量は少ない。3トレンチの南東部から池(沼)を検出する。耕土直下は地山となる。
- 10月27・28日 1B-4トレンチ掘削。北東部で河川跡検出。
- 10月29日 1B-5トレンチ掘削。1B-1トレンチ断面実測。
- 10月30日 1B-6トレンチ掘削。中央部で河川跡検出。焼土のかたまり混入する。
- 11月1日 1B-7トレンチ掘削。トレンチ中央部で河川跡を、その南側で焼土・灰原を検出する。瓦の出土をみる。
- 11月2日 1B-8トレンチ掘削。何ら遺構は検出されず。
- 11月3日 本日文化のH。発掘調査を行なう。1B-2・3トレンチ断面実測作業。
- 11月4日 1B-7トレンチ焼土部分拡張。瓦窯2基を検出する。瓦窯は耕土直下にあり、床面のみ遺存する。
- 11月5~10日 1B-8~10トレンチ掘削作業。耕土直下地山層となり何ら遺構は検出されない。
- 11月11日 2A-1・2トレンチ掘削作業。耕土直下地山層となり、少量の遺物を出土するも遺構は検出されない。
- 11月12日 2A-3・4トレンチ掘削作業。遺構はない。
- 11月13日 2A-5・6トレンチ掘削作業。依然遺構は検出されず、これより北東部への追求は止める。1B-4~6断面実測作業。
- 11月14日 口曜日にかかわらず作業を行なう。1B-8~10断面実測作業。
- 11月15・16日 2B-1~3トレンチ掘削作業。遺構は検出されず。
- 11月17・20日 1A-3~5トレンチ掘削作業。沼跡検出するのみ。2B-1~3トレンチ断面実測作業。
- 11月22~27日 1B-1トレンチ清掃作業。および写真撮影。
- 11月29・30日 1B-1トレンチに直交するトレンチ2本掘削。瓦・礎石追求。
- 12月1~11日 1B-1トレンチ平面実測作業。
- 12月13~18日 瓦窯追求。写真撮影と実測作業。
- 12月20~27日 2A-1~6トレンチ断面実測作業。これにて現地調査を完了する。なお、年をあけてトレンチの埋め戻し作業を行なう。

4. 遺構 (第6図、図版一～十)



第6図 軽野遺跡1B-1トレンチ平面実測図

今回の調査では1B-1トレンチから礎石、溝、礎・瓦敷遺構を、1B-7トレンチから瓦窯等を検出した。他には、沼跡、河川跡等があるがこれらは昭和53年度のは場整備事業を実施するまで存在していたものであり、ここでは割愛する。

1B-1トレンチ (第6・7図、図版二～四・七)

礎・瓦敷遺構 群を構成して検出された。大きく5群に分かれ、第1～5群とする。

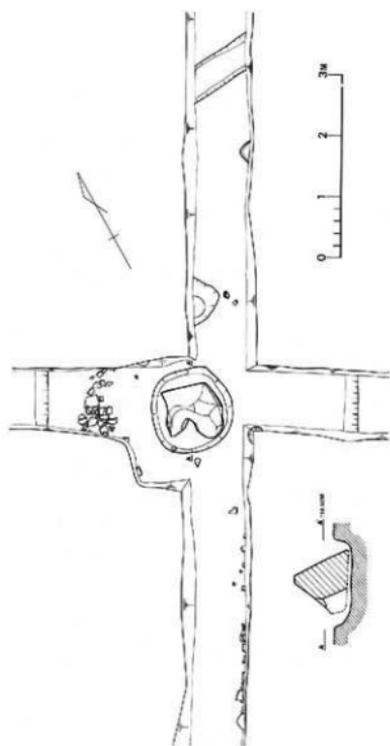
第1群：トレンチの0点から11～26mの15m間にあり、3～7cmの小礎と細片瓦とが一面に敷かれる。南側は沼によって消滅し、北側は溝(SD4)で終る。23mから北側は平瓦の破片が多くなり、24.5m地点で重弧文軒平瓦が出土し、溝の落ちぎわは平瓦が溝方向に折り重なるように出土する。第1群の東西幅は20m以上あり、西側へつづく。20～21m地点には南北方向に主軸をもつ溝SD1とその東約10mにSD2、SD1の西5.7mにSD3があり、いずれも南北方向をむく。SD1は幅0.46～0.8m、深さ約0.1mを測り、東側の肩が凸凹する。SD2は幅約2.8mあり、東側壁は段々に落ち込み、溝の底部は西側にある。深さは0.12mである。SD3は幅0.6m、深0.15mを測り、断面U字形を呈する。SD4はSD2の北延長13.5mにあり、幅2.1m深0.16mを測り、西側壁に0.3～0.4mの花崗岩の自然石が4個存在する。並んであるか判断としない。溝中央部には直径25cmの丸太がある。流木とみられる。溝SD1～SD4は同一方向をとり、平行関係にある。

第2群：SD4の東側から35.5mの7.5m間にあり、28mから32mまでは幅は少なく、32～35.5mの3.5mの間は第1群と同じく小礎、小瓦片を敷く。29m付近に平瓦の破片が散乱し、34m付近に単弁八葉軒丸瓦(A型式)が出土する。

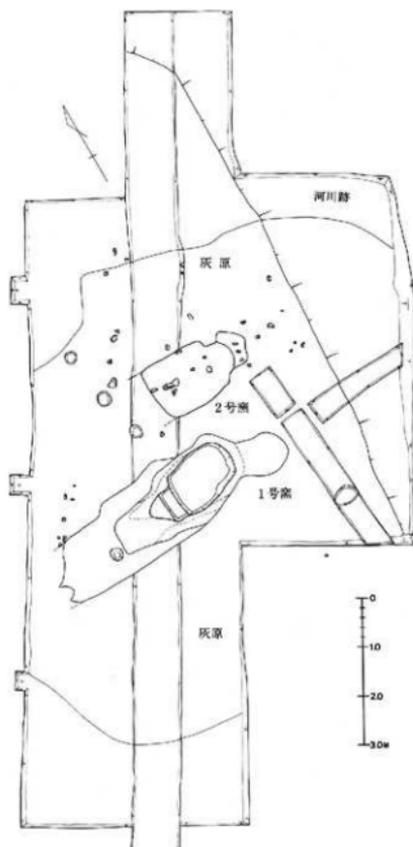
第3群：37mから45mがそれで、37～41mは比較的少なく、41mに0.12mの落ち込みがありそれより4m間は礎敷となる。この間は特に瓦の堆積が多く約0.2mの厚さを測る。平・丸瓦の出土が多く、単弁八葉軒丸瓦(B型式)も出土する。

第4群：49.5mから55mの5.5mの間で、この群は礎は少なく多量の瓦堆積をみる。整地面とするより瓦堆積地で、軒丸瓦(C型式)や唐草文軒平瓦(B型式)が出土する。

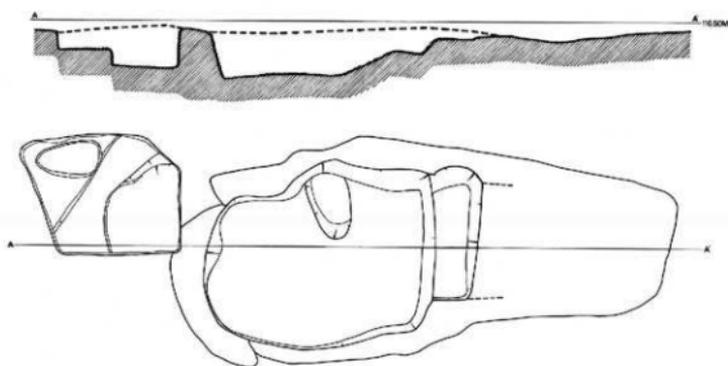
第5群：81mから85mの4mの間で、約0.1mの瓦の堆積をみる。平瓦が多く礎は少なく地山は粘土となる。



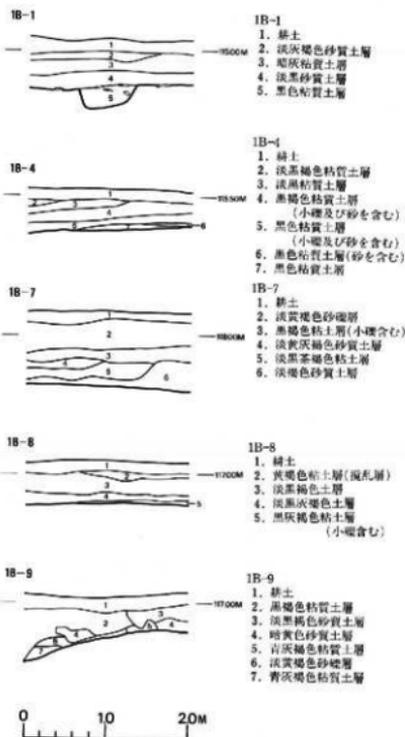
第7図 軽野遺跡1B-1トレンチ礫石周辺平面実測図



第8図 軽野遺跡瓦窯平面実測図



第9図 軽野遺跡1号瓦窯実測図



第10図 軽野遺跡1B区トレンチ断面図

礎石 トレンチ86mの表土下約0.4mから検出された大きな礎石で、南側へ大きく傾むく。南側約1/4は欠失する。表面は平坦で中央に円孔をもつ。側面を5角形にカットし、直径は東西0.9m、南北約1.0mを測り、高さは約1.0mあったとみられるが、南側の底部も欠失し断面三角形を呈する。中央の円孔は直径0.24m、深0.08mあり、底部は丸い。使用石材は花崗岩である。礎石は直径1.4mの土壌内にすえられ、深度は約0.3mを測る。埋土は淡白褐色粘土で、黒色土器片が出土した。

礎石の周囲には瓦列、溝等がある。瓦列は礎石の西1.4mにあり、トレンチの方位と平行する。平瓦・丸瓦の破片を2ないし3片を組み合せ1列にしたもので、幅は0.5mある。1段のみの遺存である。瓦列の0.55m西は大きく落ち込み沼状を呈する。

溝(SD5)は礎石の5.5m北にあり、東西方向を主軸にもつ。幅0.54m、深0.19mあり断面U字形を呈す。礎石と溝の間には柱穴が2基あり南側は直径0.8m、北側の柱穴は直径0.35mを測る。

礎石の東側は何ら遺構はなく、除々に地山面は高くなるが、約2.4mのところでは0.1mの段をみる。

1B-7トレンチ(第8・9図、図版四〜七)

瓦窯 トレンチの約40m地点で瓦窯2基と灰原、河川跡を検出した。瓦窯は2基並んであり、その東側に灰原は拡がり、河川となる。河川は最近まで存

在していたものである。

瓦窯は水田耕作土直下の地山面から検出され、標高116.5mの地点にある。地形は西側に傾斜する扇状地を呈し、その中央部に構築されたことになる。寺院の東側に位置し、眼下に寺院を見る。窯体の大半はすでに削平されているが、窯の方位は確認でき、ともに地形の高い方に焚口を設ける。ここで便宜的に南側から1号窯、2号窯と番号をつける。

1号窯：焚口から燃焼室と焼成室の1部を遺存する。遺存する窯の構造から登窯と想定される。焼成室から西方へつづく焼土面を含めると残存長3.0m、最大幅1.35mを測る。

焚口幅は0.8m、残存高約0.3mを測り、燃焼室の側壁からつづく黄褐色焼土を壁とする。石、瓦等の施設はみられない。

燃焼室は奥行1.2m、幅0.85～1.0mあり平面楕円形を呈する。側壁厚は0.1～0.18mあり、床面は2回認められ、ほぼ平坦である。燃焼室には炭が充塞していたが、瓦は平瓦片が数点出土したのみである。

焼成室は1段目のみを残す。奥行0.2m前後、幅0.8mを測り、0.1mの階段高をみる。2段目は0.06mの階段高を残すのみで、2段目以降の階段床面は消失する。わずかに黄赤色の焼土痕が1.2mつづく。

焚口の外方には古い灰原を切り込んだ幅約1.4mの落ち込みがあり、焼土・炭・原が充塞する。床面は舟底状を呈し、2次操業以降の掘り込みとみられる。

2号窯：1号窯の北0.5mにあり、床面のみ遺存する。床面は東西に長い方形を呈し淡緑青色の固く焼きしまったものである。東西0.9m、南北0.63mを測り、その東側に半月形の赤く焼け固まった部分がある。幅は0.4mあり、おそらく焚口に相当するところとみられる。このことから、方形の床面は燃焼室に当たると考えられる。床面に数片の平瓦片をみる。この床面は厚さ約0.05mあり、その約0.1mにも焼土と床面をみる。2回以上の床の貼り替えが行われたとみてよい。

灰原：1号窯の焼成窯残存部から西側1mから、河川跡まで東西10m以上、南北10mに灰の拡がりを見る。西側の堆積は薄く、河川にむかって厚くなる。最大厚は河川の肩付近で約0.3mある。2号窯周辺の灰原から軒丸瓦（A型式）、軒平瓦（A型式）の出土をみた。なお、1号窯の焼成室から2号窯の西側にかけて5個の柱穴が認められた。1号窯と重複する柱穴は1号窯を切り込む。

5. 遺物 (第1~14図、図版十一~十五)

1 瓦類

今回の調査では1B-1トレンチから大量の瓦類の出土をみた。大部分は細片の平瓦でトレンチの南東側には瓦を敷いたとみられる約10cmの堆積層も確認された。その中に、完形の平瓦や瓦当部をよく残す軒丸瓦が含まれていた。1B-7トレンチから検出された2基の瓦窯からは若下の平瓦・丸瓦の細片の出土があったのみで、灰原から数点の軒丸瓦軒平瓦の出土をみただけである。

軒丸瓦 合計で9点の出土であるが、文様、構成、形体から大きくA~Cの3型式に分類され、さらに細部の構成により細分される。

A(1~4)単弁蓮華文軒丸瓦で、細分の文様構成の相違からa~cに細分される。a(1)は小型の軒丸瓦で中央を盛り上げた中房の中央に1つの蓮子と、盛り上りの外周周縁をめぐらし、その外側に9個の珠文を配する。2重の蓮弁の中央に稜のある弁6葉と、外区内縁に21個の珠文を配し、2重周縁の周縁からなる。彫刻は深く子弁・同弁の端部はよく盛り上がる。焼成は堅緻で灰色の須恵質を呈する。丸瓦は凸面中央に×と直線を組み合わせた窯印をつける。b(2)は丸く突出する中房はAaと同じであるが、中央部は丸く山形に盛り上る。蓮弁は6葉でやや肉厚の丸味をもつ。外区内縁には11個以上の珠文を配するが前回調査出土の同型式の珠文は27を数える。周縁は低く1重の重周縁である。丸瓦は瓦当外周いっばいに付ける。胎土に砂粒を含み焼成は軟質で表面を黒くいぶし黒灰色を呈する。素地は黄褐色である。c(3~5)は8葉の蓮弁を配するもので中房はAbに似るが中房外周の珠文は7個になる。子弁は3重となり彫りは明瞭で中央に稜をもち、端部はよく盛り上る。外区内縁の珠文は密に配され30数個はあったとみられる。周縁は2重周縁となる。4・5の瓦当裏面の外周は丸く盛り上り、丸瓦との接続用補強粘土は下半分はしない。3点とも胎土にやや大粒の砂粒を含み焼成は良く、5は灰白色の須恵質で、3は淡黄褐色を呈し、4は表面を黒くいぶしたとみられる。

B(6・7)単弁蓮華文軒丸瓦で2点出土した。中房周縁は素文である。8葉の蓮弁をもち、間弁は大きくて厚く全体がつながる。文様構成は簡素文様で彫りは浅く各文様は太めである。胎土に2・3mmの砂粒を含み、焼成は7は軟質で淡赤褐色を呈し、6は良く赤褐色で堅い。6は丸瓦部の凸面を縦方向にヘラ削りし、凹面も補強粘土後、縦方向になる。

C(8・9)複弁蓮華文軒丸瓦で中房の直径は大きく1+8の蓮子をもつ。細弁の複弁8葉の蓮弁を配し弁の先端は尖りぎみである。弁のまわりを細線でかこむ間弁はY字状を呈する。外区内縁には周縁を配し周縁は素文である。全体的に彫りは浅く面的構成である。丸瓦部の接続は瓦当外周の2cm内側に溝を彫り、そこに丸瓦をさしこむ印籠付けであるが、外側の補強粘土は少なく極端なカーブを描き段をなす。8は溝の奥まで丸瓦を挿入せず、0.8mmのすき間をみる。胎土はともに2mm前後の砂粒を含み焼成は5は良く暗灰色を呈し、8は軟質で黄褐色である。

軒平瓦 合計で6点出土した。これも文様構成などからA・Bの2型式に分類できる。

A(10~12)重弧文軒平瓦で3種類に細分される。Aa・bは掃書きによって重弧文を表わし3重弧となる。その下部を等間隔に指押し類とするが補強粘土はしない。a(10)は弧の間隔の大きなもので、指押しは右手親指で右上方向に押し6個配する。平瓦部凹面の前約5cmをなで調整し後半に細い布目を残す。そこに粘土板切り難し痕をみる。凸面は縄目タタキ後でいねいになでタタキを消す。b(12)は弧の内側の袋いもで、顎指押しは右手親指で左上方向に施す。平瓦部の凹面は先端まで布目を残し、凸面は頸裏に縄目タタキを残し他を縦方

軽野遺跡軒丸瓦計測表

(単位=mm)

遺物 番号	型式 直徑	内 区						外 区						備 考
		中房径	蓮子数	弁区径	弁幅	弁数	広	内 縁		外 縁		備 考		
								幅	高	幅	高			
1	A-a 103	19	1+K+9	61	15	T 6	18	6	8	5	J 2	灰原出土		
2	A-b (156)	24	1+K+8	123	31	T 6	20	10	8	5	J 1			
3	A-c (142)	20	1・不明	(108)	22	T 8	19	8	12	7	J 2			
4	A-c (151)	21	1+K+7	(105)	20	T 8	24	9	12	7	J 2			
5	A-c (150)	...	不明+4以上	(108)	19	T 8	17	7	11	6	J 2	灰原出土		
6	B 144	27	O	106	19	T 8	14	6	8	3	O			
7	B 148	31	O	104	18	T 8	14	6	9	3	O			
8	C 167	56	1+8	110	26	F 8	24	10	13	3	O	平城宮6225型式		
9	C 153	58	1・8	103	24	F 8	22	10	12	3	O	平城宮6225型式、灰原出土		

軽野遺跡軒平瓦計測表

(単位=mm)

遺物 番号	形 式	瓦										全 長	頸の形態		備 考			
		上 弦 山	弧 深	下 弦 山	厚 巾	内 区 厚 巾	内 区 文 様	上 外 区 厚 巾	上 外 区 文 様	下 外 区 厚 巾	下 外 区 文 様		監 市	編 区 文 様		文 様 の 深 さ	直	曲
10	A-a 296	56	314	33		G3								2		O		押圧文6
11	A-c 259	51	302	32		G2								1	342	O		瓦当面へラ削り 灰原出土 押圧文2個以上
12	A-b -	-	-	30		G3								2		O		
13	B 228	61	272	58	26	KK	17	K	20	K	19	K	2	369		O		平城宮6663型式
14	B 223	64	272	62	25	KK	19	K	19	K	19	K	2	332		O		平城宮6663型式

軒瓦計測表記号

- T 単 弁
- F 複 弁
- G 弧弦文
- KK 均型押圧文
- S 珠 文
- K 国線・車線
- J 瓦間文
- O 素 文

向にへラ削りする。c(11)は瓦当部をへラ削り後上端にやや太目の2条の弧を配するもので重弧文の軒平瓦としてよいと考えられA型式とした。平瓦凹面には模骨痕が残る。凸面は縄目タタキ後縦方向に荒くへラ削りする。頸は直線頸である。胎土はいずれも微砂粒を含み、焼成は10・11は軟質で黄褐色を、12は良く暗灰色を呈し須恵質である。

B(13・14)均正唐草文軒平瓦で3点出土した。いずれも同范品であり、ここでは完形品の2点について取り上げる。文様は左右対称の3回反転の唐草文を配しやや肉厚に表わす。外区区線は国線を配す。頸は断面三角形形状に粘土を補強し曲線頸を呈する。14の平瓦部凸面は縦方向に大きく7面にへラ削りし面取り状を呈する。13は細かくへラ削りを施す。両者とも平瓦部凹面先端を横方向にへラ削りする。また、両側面はへラ削りを施すのであるが、所々に巻巻造り分割法により生じた斜離痕をみる。この瓦は4分割によって製造されたものである。両側端部の約2/3を斜離させている。これは丸瓦をかみあわせる時の調整の為打ちかいた痕跡とみられる。胎土は1～5mmの砂粒を含み、焼成については13はやや軟質で淡褐色を、14は良く暗灰色を呈し須恵質である。

丸瓦(15・16)ともに行基型式のもので、今回の調査では玉縁丸瓦の出土はなかった。ともに、凸面を縄目タタキ後へラ削りを施し、15は縦方向に、16は細かくていねいに行なう。両側面はへラ削りし、一方の内外面もへラ削りするが他方は内側だけである。いずれも胎土は1～3mmの砂粒を多く含み、焼成は堅緻で暗灰色を呈

し須恵質である。なお、両者とも狭端部の側端を三角形にかく。

小結 これら瓦類のうち軒丸瓦A a(1)、Ac(5)、C(9)、軒平瓦Ab(12)、丸瓦(16)は瓦窯灰原から出土し、軒丸瓦9は焼土片とともに出土した。他は1B-1トレンチの南側から出土したものである。軒丸瓦の瓦当と丸瓦の接合法はA型式は鬚付けでC型式のみ印籠付けである。

ここで軽野遺跡出土の文様瓦について他の遺跡との検討を行ってみよう。軒丸瓦A型式の単弁八葉軒丸瓦は野々目廃寺からも出土するが他に出土例はない。しかし、軒丸瓦C型式の八葉系の軒丸瓦は蒲生郡雪野廃寺、宮井廃寺、蒔田廃寺、愛知郡妙園寺遺跡、小八木廃寺、野々目廃寺からも出土し、更に湖北地方の井ノ口遺跡、今西遺跡(浅井寺)からも同型式のモチーフを持つ瓦が出土している¹⁰。野々目廃寺、今西遺跡の瓦当中房には十印の緩線をみる。このことから軒丸瓦B型式は愛知郡のみの特徴と思われる。また小型のA a型式も同じであろう。C型式の複弁八葉軒丸瓦は平城宮6225Bと似る¹¹。法華寺、唐招提寺、長岡宮等で同范品が出土している。

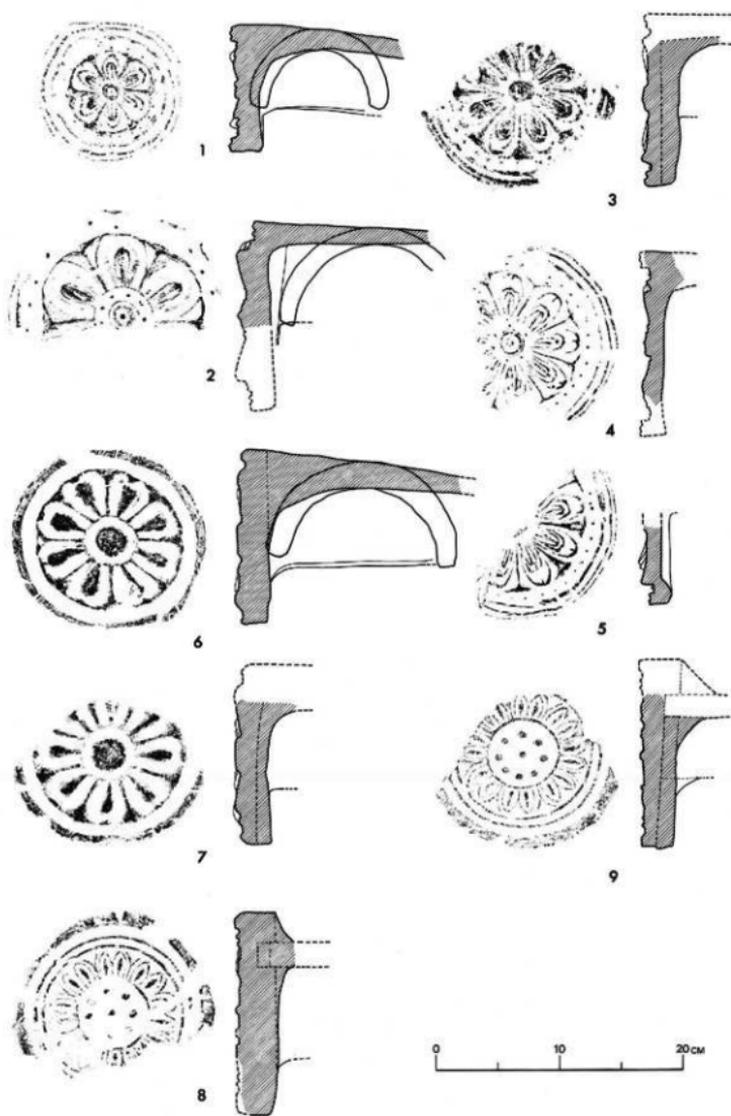
軒平瓦A型式の指圧をした重弧文軒平瓦は小八木廃寺、野々目廃寺、雪野廃寺から出土している。小八木廃寺の重弧は2重弧となり指圧の数ははるかに多い。宮井廃寺の指圧は大きく重弧の線の細さはA b型式に近い。A c型式については、神崎郡五箇庄町小流廃寺、野々目廃寺出土瓦によく似た文様をみる。B型式の外区を圏線で表わしたもとのしては、大津市南滋賀町廃寺と彦根市恒河寺遺跡(竹々鼻廃寺)がある。また、蒔田廃寺からは唐草を縦長に表現したものが出土している¹²。この型式は平城宮跡6663C¹³と極似し法隆寺・唐招提寺・長岡京久世廃寺からも出土する。この型式は軒丸瓦6225型式と組み合わせるもので平城宮第二次朝堂院から出土する。このことから軒丸瓦C型式と軒平瓦B型式はセット関係にあるといえる。ただ、平城宮6663C型式の唐草文様の左側第3単位は第1支葉を欠き、左側第2単位にも違いをみる。また、軒丸瓦も同様で所々に相違をみる。両者とも平城宮出土瓦より少し小ぶりである。しかし、同范品といっても良いほど似る。

なお、今回の調査では出土しなかったが前回の調査において、軒平瓦の中に3重弧文様の上弧線と下弧線の間をへら状工具で縦に線を等間隔に入れ、顎に指圧を施したものが出土している(図版十一)。ここでこの軒平瓦を仮に軒平瓦A d型式と分類しておきたい。

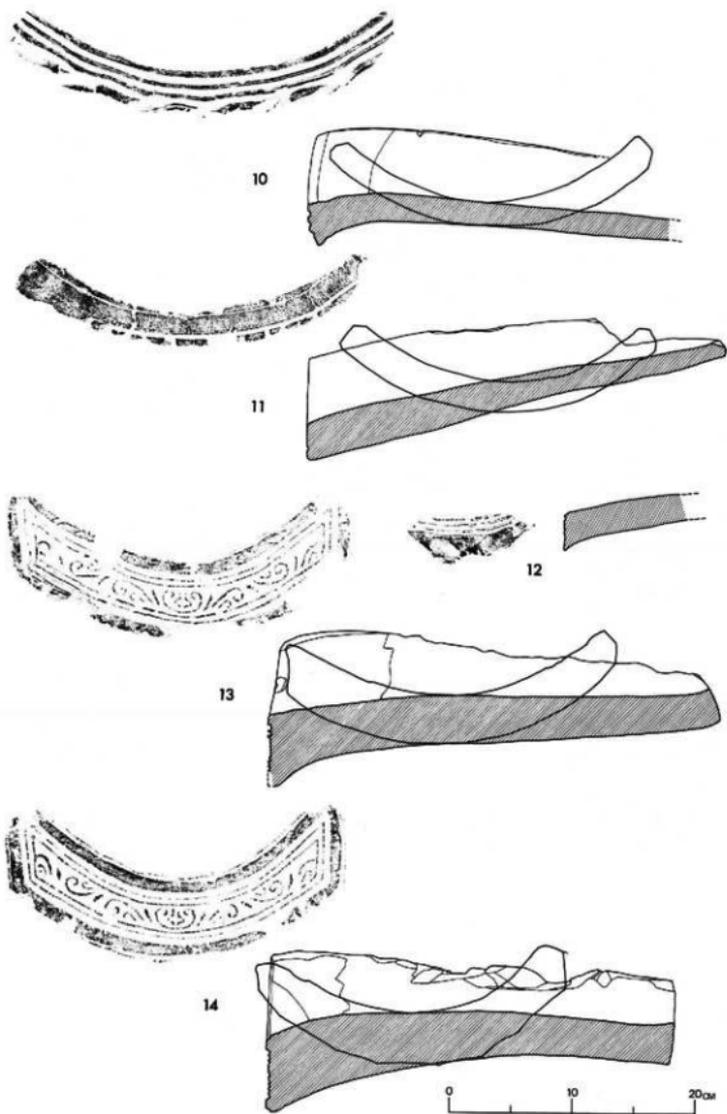
つぎに、軒丸・軒平瓦のセット関係についてふれておこう。軒丸瓦Cと軒平瓦Bが組み合わせることは上記で述べたとおりである。軒丸瓦Aは軒平瓦Aと組み合わせることはできよう。その中で、小型の軒丸瓦A aは、重弧文の細い軒平瓦A bとセットになるとと思われる。両者は瓦窯灰原からも出土しており、同時期のものと考えられる点などの理由にもよる。そうなると、大型の軒丸瓦A b・cは軒平瓦A aと組み合わせることができるが、軒平瓦にはA-d型式のものもあり、詳細なセット関係については軒丸瓦B型式も含め後日の研究にゆづりたい。

これら上記の軒瓦の時期については、軒丸瓦Cおよび軒平瓦Bは平城宮第二次朝堂院出土瓦と全く同様であり、法隆寺、唐招提寺、長岡宮、久世廃寺などにもこの系統の瓦の出土がある。天平期から長岡京期に位置づけが可能で、8世紀後半頃に比定されよう。

軒丸瓦Aと軒平瓦Aは、当廃寺創建時に伴うものと考えられ、軒平瓦の重弧文の特徴からこれまで白鳳期と考えられてきた。しかし、同伴する土器をみるとその製作は白鳳期まで遡らすことは困難であり、また、軒平瓦の顎をみると白鳳期の特徴である段顎はなく、むしろ奈良時代の形態にある曲線顎となる。このことから、軒平瓦A型式は白鳳期の文様をそのまま奈良時代まで受け継いだ工人在製作したと考える。奈良時代前期の要素をもつ瓦として位置づけられよう。このようにみると、軒丸瓦A、軒平瓦Aが軒丸瓦C、軒平瓦B型式より先行し、連続した時期として位置づけられる。



第11圖 輕野遺跡出土遺物(軒丸瓦)実測圖



第12圖 輕野遺跡出土遺物(軒平瓦)実測圖

2 土器類

今回の調査は細長いトレンチ調査のため、遺構から出土した遺物は少なかった。さらに、出土遺物の中には揚整備事業によって動かされ、細片化したものが多く、資料的価値を失なったものがあつた。このような状況下において、遺構面および地山面から出土した土器は比較的信憑性をおけるものとして述べてみよう。ここでは器種ごとに記述する。

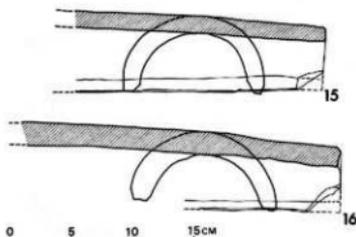
須惠器 杯蓋(1・2)、杯身(3~11)、壺(12)、甕(13・14)がある。

杯蓋はいずれも口縁端部をわずかに垂下させるもので、1の端部は尖りぎみである。天井部は平坦に近く、1は天井の約1/3をへら削りする。1は口径15.2cm、器高3.6cmを測り、胎土は精良、焼成は良く暗灰色を呈する。2は胎土に微砂粒を含み、焼成は良く灰白色である。1は1B-10、2は1B-3トレンチ地山面から出土した。

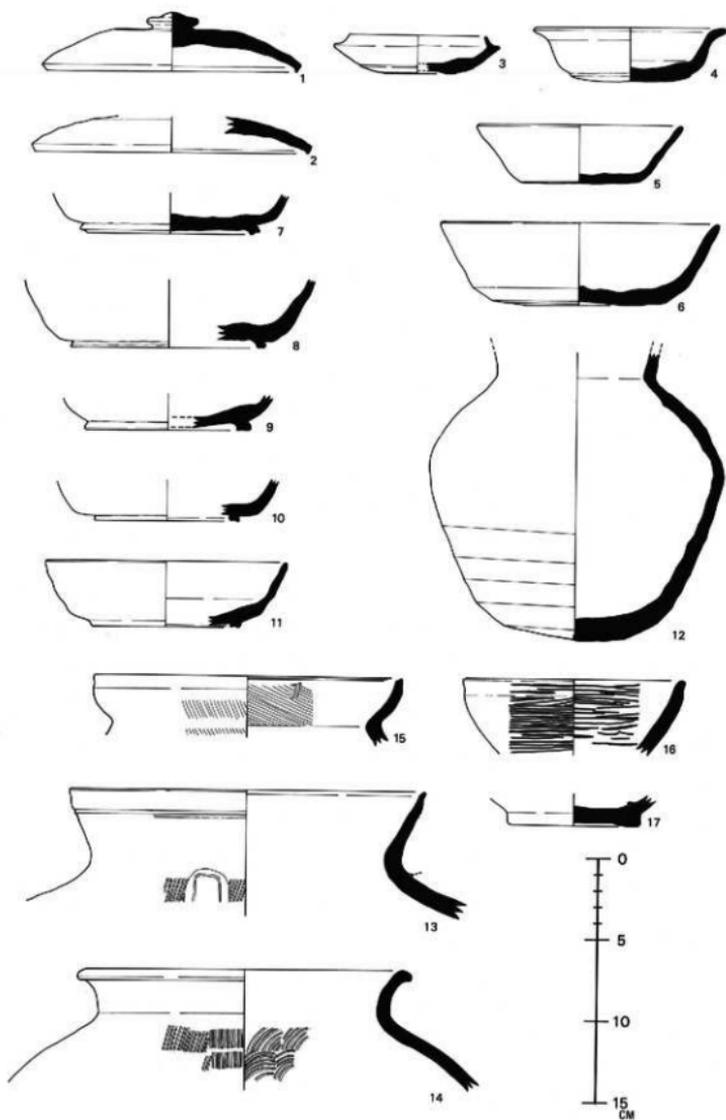
杯身は立ち上りのある3と平底4~6、高台付の7~11がある。3は1B-1礮石東拡張トレンチから出土した。小型の杯身でこの型式の終末期のものである。底部外面は未調整で、胎土に砂粒を含み、焼成は良く灰白色を呈する。4は口縁部を大きく外反させ、体部と底部との境界に段をもつ。底部は粗雑へら削り調整を施す。復元口径11.4cm、器高3.3cmを測る。胎土に微砂粒を含み、焼成はやや不良で淡灰褐色を呈する。1B-1礮石西拡張トレンチから出土した。5・6は1B-3トレンチ東北部から出土した。5の器型は薄く、底部は平坦になる。底部外面はへら切り後ナゲ調整する。口径12.4cm、器高7.2cmあり、胎土に石英を含む。焼成は良く灰白色を呈し、外面の約1/3は黒灰色である。6は大型の器で、口縁部をわずかに外反させる。底部外面はへら切り後かるくで、体部との境界屈曲部のみへら削りする。口径16.8cm、器高5.0cmを測る。胎土に微砂粒を少量含み、焼成は軟質で白灰色を呈する。高台付杯身は完成品ではなく、高台の特徴的なものを取り上げた。高台はいずれも低く接続後の調整は粗雑である。7は外方へふんばり、内端の接地するものである。8は外方へふんばり端面全面が接地する。大型の杯身で底部外面はナゲ調整する。7・8は1B-4トレンチ中央付近から出土した。胎土・焼成はともに良く、7は淡灰色、8は灰青色を呈する。9は内円する高台で、底部外面をナゲ調整する。胎土に1mm前後の砂粒を含み、焼成は良く灰白色を呈する。1B-3トレンチから出土した。10は底部外内の約1cm内側に短い高台を付けたもので、1B-1トレンチの礮石横から出土した。11は内傾する短い高台を呈し、体部内外面に横ナゲ痕をよく残す。1B-1トレンチ南西端から出土した。10・11とも胎土に微砂粒を含み、焼成は良く灰白色を呈する。

壺12は1B-7トレンチの瓦窯から約20m北東の地山面から出土した。口縁部を欠失する。体部下位をへら削りし、底部は丸味をおび坐りは良くない。器面の内外面に緑色系と黄褐色系の自然釉が多量に付着し、特に外面肩より上位、内面下位は著しく、内面は約3mmの厚さで付く。また、自然釉の気泡も密にある。素地を残す部分は少ない。体部最大径18.1cm、残存器高17.5cmで、胎土に微砂粒を含み、焼成は堅緻で灰白色を呈する。この器はおそらく瓦窯で焼成したが、自然釉が付きすぎ放棄された可能性がある。

甕13・14は1B-4トレンチの地山面から出土したもので、13は口縁端部をつまみ上げ、口縁部外面に凹線が2条めぐる。体部の肩に耳を付してあったとみられ、その痕跡を残す。14は口縁部を外反させ、体部外面を



第13図 軽野遺跡出土遺物(丸瓦)実測図



第14図 輕野遺跡出土遺物(土器)実測図

平行タタキ、内面に円形浮文をみる。胎土はともに石英を含み、焼成は良く、13は暗灰色、14は灰白色を呈し、内面は黒灰色である。

土師器 壺(15)が1B-4トレンチから出土した。内凹する口縁部の端面に段をもつ。外面は縦方向のヘケ目後かるくなくて、内面は傾め方向にヘケ調整する。胎土に砂粒を含み、焼成は軟質で黄褐色を呈する。

黒色土器 壺(16)が1B-1トレンチ礎石横から出土した。破片は2点あり礎石の南側と東側に礎石の底部近くから接するように出土した。口縁部はわずかに内湾し、端部を外反させる。内外面横方向にいいいなへラ研磨する。外面の方が密である。復元口径13.4cmを測る。胎土に微砂粒を含み、焼成は良く素地は淡灰褐色である。内外面黒色を呈する。

山茶壺 壺(17)が1B-7トレンチから壺12と伴に出土した。断面三角形の低い高台を付け、その端部に多くのキズが付く。底部外面の切りはなしは糸切りとみられる。底径8.1cmを測る。内面に重ね焼きによる他の器種の破片が付着する。胎土・焼成とも良く淡灰色を呈し、表面に黒色斑文をみる。

小 結 今回出土した土器の中で比較的年代をとらえられるものは須恵器の杯蓋で、奈良時代でも古い時期まで遡る。平城宮ⅠもしくはⅡに相当するとみられ、8世紀前葉に比定される。この時期に属するとみられる土器には、杯身6、壺12がある。高台付の杯身にはこれより1段階新しい要素を持つ7～9がある。奈良時代後半の特徴をもつものとしては壺13・14と杯身5があり、特に5は平城宮Ⅱに近似し、8世紀第3四半期頃に位置づけできる。

杯身11は高台、口縁部の特徴から平安時代に相当するとみられ、9世前葉から中葉に比定される。黒色土器16も同時期とみてよいであろう。

6. ま と め

今回の調査は、暗渠排水予定地に細いトレンチを約30本設定した。これは軽野廃寺の東域約1/3に対応し、前回の調査で明らかにできなかった寺域の確認および伽藍配置を確認づけられるものとして期待された。

しかし、検出された遺構は上記の問題を解決する資料としては充分ではなかった。その中で、礎・瓦敷遺構や礎石、瓦窯および軒瓦類の検出は、廃寺の性格を裏づけるものとして満足させられる。

前回の調査では廃寺の南門や西・南を限る溝等の検出があり、今回検出の1B-1トレンチ第1群礎・瓦敷遺構は、その南門の北側にあたり、南門からつづく整地面として位置づけられよう。伽藍配置から想定すれば、寺院の中央の空間部分に相当する可能性をもつ。第3・4群は第1群整地層の北側正面に当たり、南門から45~50mの位置になり、塔ノ塚(塔推定地)の約30m南東である。瓦の堆積層と軒瓦の出土から、この部分に何らかの建物の存在を示唆するものとして注目される。

礎石は第4群から約36m北東にあり、塔の塚の東約46mの位置になる。掘り形から出土した黒色土器は9世紀前半のものと考えられ、この時期に礎石を中心とした堂宇が想起される。ただ、礎石は他から搬入された可能性も残し、詳細は明らかではない。

瓦窯については、伴出遺物が少なく時期決定に失くが、灰原から出土した軒丸瓦(A型式)、軒平瓦(A型式)および軒九瓦(C型式)を当瓦窯焼成瓦とするならば、瓦窯は創建期に築造され、2次操業以降に軒丸瓦C型式が焼成されたとみられる。ただ、1号・2号の前後関係については明らかではない。なお、焚口の位置が扇状地の高い方に設けられていることは、大津市穴太瓦窯²³と同形態を呈する。登窯の構築法を究明する上で注目される共通性をもつ。

この瓦窯の位置は、塔の塚から南東約120mに位置し、瓦窯を寺域内に構築したのか、それとも寺域外であったのかによって寺域の東西範囲を考える資料になる。

大津市榎木原瓦窯²⁴は南滋賀町廃寺に伴う瓦窯で、廃寺の西築地の外側に瓦工房とともに築造されている。先述の穴太瓦窯は穴太廃寺の瓦窯とされているが、寺院の位置・範囲・規模は明らかではない。しかし、瓦の散布形態・地形構造等から穴太瓦窯は寺院外に立地する可能性をもっている。ただ、飛鳥期の寺院とされる衣川廃寺²⁵は寺域内に瓦窯をもち、決して瓦窯は寺域外にあるとはかぎらない。一般的に生産遺構は寺域内に造られることは少なく、畑田廃寺²⁶では寺域外から工房跡が検出されている。当瓦窯も寺域外に築造されたと考え方が妥当とみられる。

このことから、当遺跡の東限は瓦窯の西、小字塔の塚から120m以内に想定され、前回検出の西限から復元すると、東西距離を150m位にするのが最も妥当と思われる。寺院の東西幅を1町半と推定してよいであろう。

当遺跡の時期については、出土遺物は軒丸瓦A型式、軒平瓦A型式は須恵器蓋1・2と同時期といえ、奈良時代前葉の製品とみられる。軒丸瓦C型式、軒平瓦B型式は平城宮では天平年間の第二次御堂院造宮軒瓦とされ、長岡宮でも同范品を使用している²⁷。軒丸瓦A、軒平瓦A型式に続く奈良時代後半の軒瓦に比定してよいであろう。

このことから、軽野廃寺は奈良時代前葉も早い時期に創建され、以後連綿と寺院は存続し、山茶碗の出土する平安時代後半の12世紀から13世紀に衰退したといえる。それは律令国家体制の崩壊とともに寺院の生命も消滅したと考えることができる。

おわりに、1B-1、1B-7トレンチの遺構は、農林部との協議により暗渠排水溝の位置を変更し遺構を

現状で保存した。

註

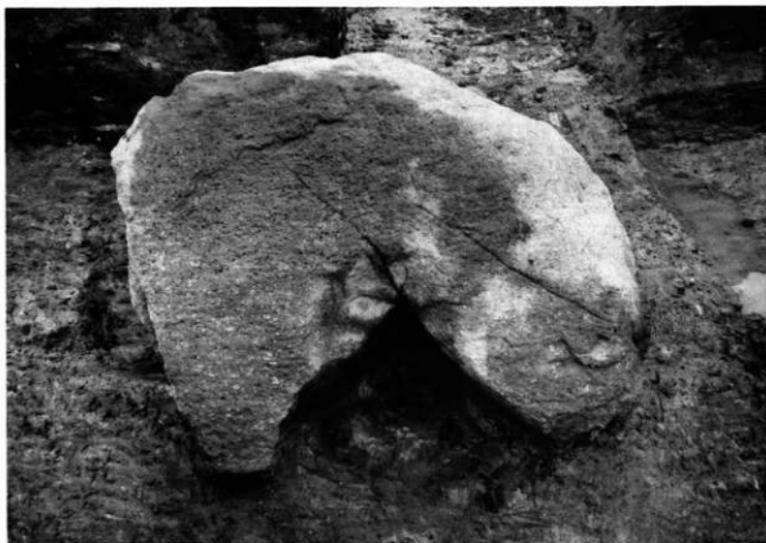
- ① 昭和53年度発掘調査
- ② 近藤 滋「小八木庵寺調査報告」(『滋賀県文化財調査年報』昭和49年度 滋賀県教育委員会 昭和51年)
- ③ 近藤 滋「秦荘町野々日遺跡」(『は場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅴ 滋賀県教育委員会 (財)滋賀県文化財保護協会 昭和53年)
- ④ 昭和53年度発掘調査
- ⑤ 田中勝弘・近藤 滋「愛知郡秦荘町コトコ敷地内古墳調査報告」(『滋賀県文化財調査年報』昭和48年度滋賀県教育委員会 昭和50年)
近藤 滋「秦荘町上紋野古墳部」(『は場整備関係遺跡発掘調査報告書』Ⅳ-Ⅱ 滋賀県教育委員会 (財)滋賀県文化財保護協会 昭和52年)
近藤 滋・藤川清文他「秦荘町上紋野古墳群」(『は場整備関係遺跡発掘報告書』Ⅴ 滋賀県教育委員会 (財)滋賀県文化財保護協会 昭和53年)
- ⑥ 昭和54年度発掘調査
- ⑦ 近藤 滋・石橋正嗣・石原道洋『磐野正梁遺跡発掘調査報告書』(秦荘町教育委員会 昭和54年)
- ⑧ 葛野泰樹・山中仁志「大岡寺遺跡発掘報告書」(滋賀県教育委員会 (財)滋賀県文化財保護協会 昭和57年)
- ⑨ 本書掲書第三章
- ⑩ 葛野泰樹・徳網克己『市道跡発掘調査概要』Ⅰ (愛知川町教育委員会 (財)滋賀県文化財保護協会 昭和58年)
- ⑪ 西田 弘先生の御教示による。
- ⑫ 奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所基準資料』Ⅰ 瓦編Ⅰ(昭和49年)
奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告』Ⅵ (昭和51年)
- ⑬ 西田 弘先生の御教示による。
- ⑭ 前掲書⑩
- ⑮ 林 博通・葛野泰樹「滋賀県大津市穴太遺跡の瓦函跡」(『考古学雑誌』第64巻第1号 昭和53年)
- ⑯ 林 博通・葛野泰樹他『惣木原遺跡発掘調査報告』Ⅰ～Ⅲ (滋賀県教育委員会 (財)滋賀県文化財保護協会 昭和50・51・56年)
- ⑰ 丸山竜平他「衣川庵寺発掘調査報告」(滋賀県教育委員会 昭和50年)
- ⑱ 昭和53年度発掘調査
- ⑲ 前掲書⑩



1 軽野遺跡遠景（北東から）



2 1B-1トレンチ 礎石（北西から）



1 1B-1トレンチ 礎石 (南西から)



2 1B-1トレンチ 礎石 (北西から)



1 1B-1トレンチ 礎石(南東から)



2 1B-1トレンチ 礎石横瓦列



1 1B-1トレンチ 礎石橋・溝 (南東から)



2 1B-⑦トレンチ 瓦窯、左=1号窯、右=2号窯 (東から)



1 1号瓦窯・灰原(東から)



2 1号瓦窯(断面)



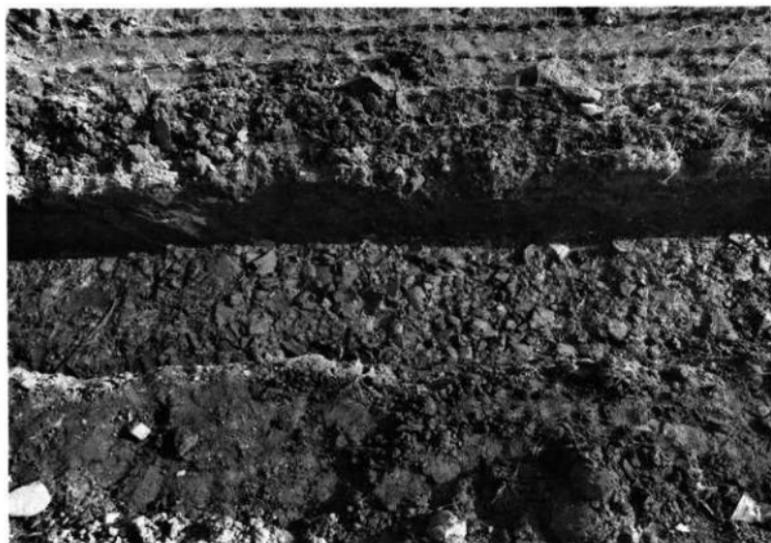
1 1号瓦窯燃焼室縦断面（南から）



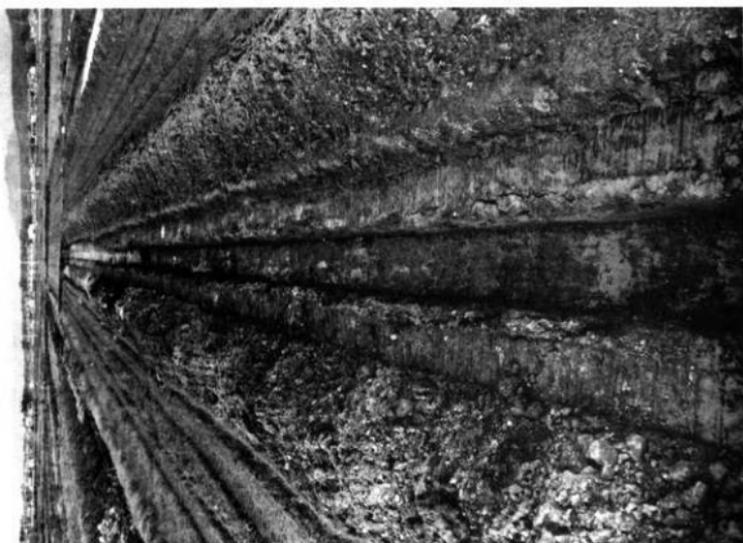
2 1号瓦窯燃焼室横断面（東から）



1 2号瓦窯 (北から)



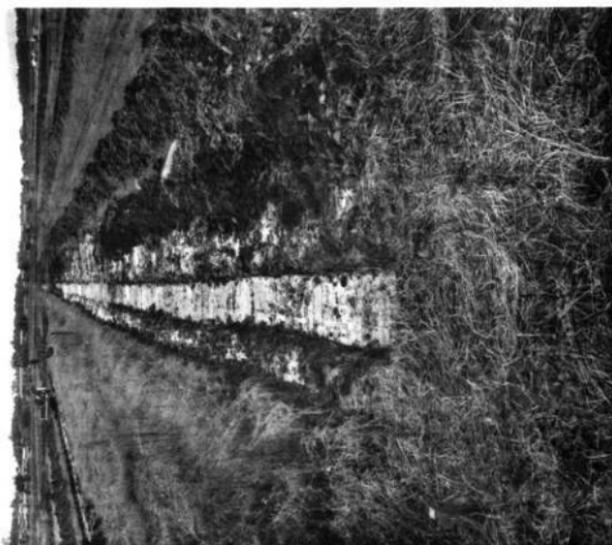
2 1B-1トレンチ 瓦堆積状況 (北西から)



1 I B-⑤ トレンチ (南西から)



2 I B-④ トレンチ (南西から)



1 2A-4 トレンチ (北東から)



2 2B-2 トレンチ (南東から)



1 2A-3トレンチ 旧河川跡 (南から)



2 1B-5トレンチ 旧河川跡 (南から)



1



2



3



4



5



6



7



9



8



10



12



11



A-d



15



16



13



14



1

2



4



5



6



7



8



11

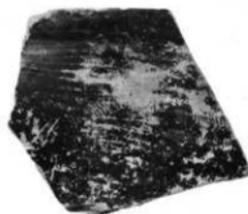


12



14

13



16



17

出土土器



昭和58年3月

ほ場整備関係遺跡発掘調査報告X-1

編集 滋賀県教育委員会

発行 滋賀県教育委員会

財団法人 滋賀県文化財保護協会

印刷 有限会社 真 陽 社

京都市下京区油小路仏光寺上ル
TEL (075)351-6034